

旧南洋群島の神社跡地調査報告

富井 正 憲

TOMII Masanori

(COE 共同研究員)

中 島 三 千 男

NAKAJIMA Michio

(事業推進担当者)

大 坪 潤 子

OTSUBO Junko

(COE 研究員・RA)

サイモン・ジョン

Simon JOHN

(COE 調査研究協力者)

はじめに

本調査研究グループは、第3班のテーマ「環境と景観の資料化と体系化」のうち、「環境に刻印された人間活動」の解析とそのデータ化という課題を、海外神社を通して行っているグループである。近代における日本人の海外進出、日本の植民地支配・勢力圏の拡大に伴って、進出した日本人や日本国政府によって建てられた神社（海外神社）とその環境に関する資料を収集し、かつ戦後の現存・現況跡地調査を行ない、データベースを作成して、戦前戦後の海外神社の資料化を図ると共に、その資料を用いて環境変容を通時的、共時的に考察し、併せて環境に刻印された人間活動に関する資料の体系化を図ることを目的としている。

本稿は海外神社の戦前戦後のデータベースを作成するため、研究スタートの初年度にまとめた旧樺太（ロシア南サハリン地区）の調査報告に引き続き、2年度の今夏に行った旧南洋群島（以下、南洋群島と表記。島名を含めその他の事項も本稿では原則として、日本統治時代の表記・呼称をそのまま用いた）のサイパン支庁（現北マリアナ諸島連邦）パラオ支庁（現パラオ共和国）の神社跡地の現存及び現況調査の報告である。

以下、Iで委任統治領としての南洋群島の歴史的概観を行い、IIで南洋群島における神社の創立を述べ、IIIで神社跡地の現況調査報告を行う。添付資料として、今回調査を行った神社跡地現況の①調査表、②実測図面、③写真を各島ごとに載せる（但し紙数の関係により一部割愛した）。

I 委任統治領「南洋群島」

1 南洋群島の歴史

赤道以北の東経 130～175 度，北緯 0～22 度の間に散在する，マリアナ群島，カロリン群島，マーシャル群島の 3 群島は，戦前は南洋群島として日本の管理下（国際連盟・委任統治領）にあった。今日，日本列島に住む人々は，台風情報において「はるか南方海上に台風が発生しました」と言う情報を何気なく聞いているが，「はるか南方海上」とは，まさにこの南洋群島が散在している海上なのである。全群島の島嶼の数約 1,400 余島，総面積は約 2,000 平方キロ，沖縄県や神奈川県の面積に匹敵する。

また，この地域は太平洋戦争時，1944 年の夏以降，日米両軍の激戦が展開され，現地人を含めて多くの戦没者を出した「玉碎の島」，「慰霊の島」としても知られる。

戦前，この南洋群島は日本においては一般に「内（裏）南洋」と呼ばれ，「外（表）南洋」と呼ばれた，日本の支配が及ばない島嶼部を含む東南アジア地域とは区別された。

戦後は米国の信託統治領（国際連合）になったが，現在ではそれぞれ「独立」して北マリアナ諸島連邦，パラオ共和国，ミクロネシア連邦，マーシャル群島共和国となっている。

マリアナ群島は，1521 年にポルトガルの探検家マジェランにより「発見」せられ，1565 年にスペインがその領有を宣言した。当時のスペイン皇帝ヒリッポ第 4 世の皇后マリアナの名を冠したと言われる。カロリン群島は 1527 年，ポルトガル人によって「発見」せられたが，1680 年代にスペインが領有，これも同国王カロロ第 2 世の名を借りて，カロリン群島と名づけられたと言う。しかし，マリアナ，カロリン両群島にスペインの主権が確立したのは，「再分割」時代の 1886 年以降の事であった。マーシャル群島の「発見」は 1500 年代あるいは 1700 年代と言われるが，一般に知られるようになったのは，1781 年（一説に 1788 年）英人船長マーシャルの探検にはじまる。当初，英国領とされていたが，1888 年の英独協商の結果，ドイツ領となっていた（南洋庁 1934：14-16）。

1898 年の米西戦争で敗れたスペインは翌年フィリピン群島とともに，マリアナ群島中のグァムを米国に割譲。また，グァムを除くマリアナ，カロリン両群島をドイツに売却した。こうして，旧南洋群島のマリアナ群島，カロリン群島，マーシャル群島は全てドイツ領になった。ドイツはこれらの諸島を含めた，南太平洋諸島の統治のために，総督府（ニューギニアのラバウル）を置き，この下に先の 3 群島にはヤップ，ポナペ，ヤルートにそれぞれ政庁を設けて知事をおき，各群島を統治せしめた。そして，北方遙かに太平洋を隔てて青島と呼応し，東洋の覇を制せんとした（小菅 1985：42-45）。

これら諸島における，原住民は，大別してチャモロ族とカナカ族の二つに分けられるが，人種的には同一とされ，ただ社会的，文化的見地より区分されたものとされている。主に，マリアナ群島に住むチャモロ族は 16 世紀以来のスペイン統治の影響を受け，カトリック教化され，またスペイン人およびフィリピン人と混血して容貌及び生活様式ともにやや西欧化している。これに対して，主に，カロリン，マーシャル群島に住むカナカ族は，欧米人がこれら諸島に本格的に渡来したのが 19 世紀に入ってからであったので，外来者との混血も少なく，固有の社会，自然経済の様相を強く残している（矢内原 1935：12-15）。

1934 年 4 月 1 日現在の統計では，現地人（島民）5 万人の内カナカ族は 46,400 人と 93% を占める。残りの約 3,600 人がチャモロ族であるが，この内，3,200 人即ち 89% がサイパン島を中心とするマリ

アナ群島に住んでいる。

マリアナ、カロリン群島は、名目的にはスペイン統治が三百数十年続いたが、先にみたように、実質的統治は十数年で、宣教師の活躍以外には治績に見るべきものはなかったとされている。ドイツ時代になって、領有期間は16年と長くはなかったが、産業的経営、通信施設、燐鉱開発、教化的施設、行政的施設など施設経営に見るべきもの「頗る多」かった。

しかしながら、1914年7月第1次世界大戦が勃発すると、8月23日、日本は日英同盟によりドイツに宣戦布告、10月14日、日本海軍（南遣枝隊）は赤道以北のドイツ領南洋諸島を占領した。1919年6月、ヴェルサイユに於いて締結した平和条約により、ドイツはその海外属地に関する一切の権利を主たる同盟及び連合国に放棄したので、各国は平和条約（国際連盟規約）第22条に準拠し、太平洋中赤道以北に位する旧ドイツ領の施政を日本に委任する事に一致し（C式委任統治）、国際連盟理事会は日本を受任国とする委任統治事項を定めた。

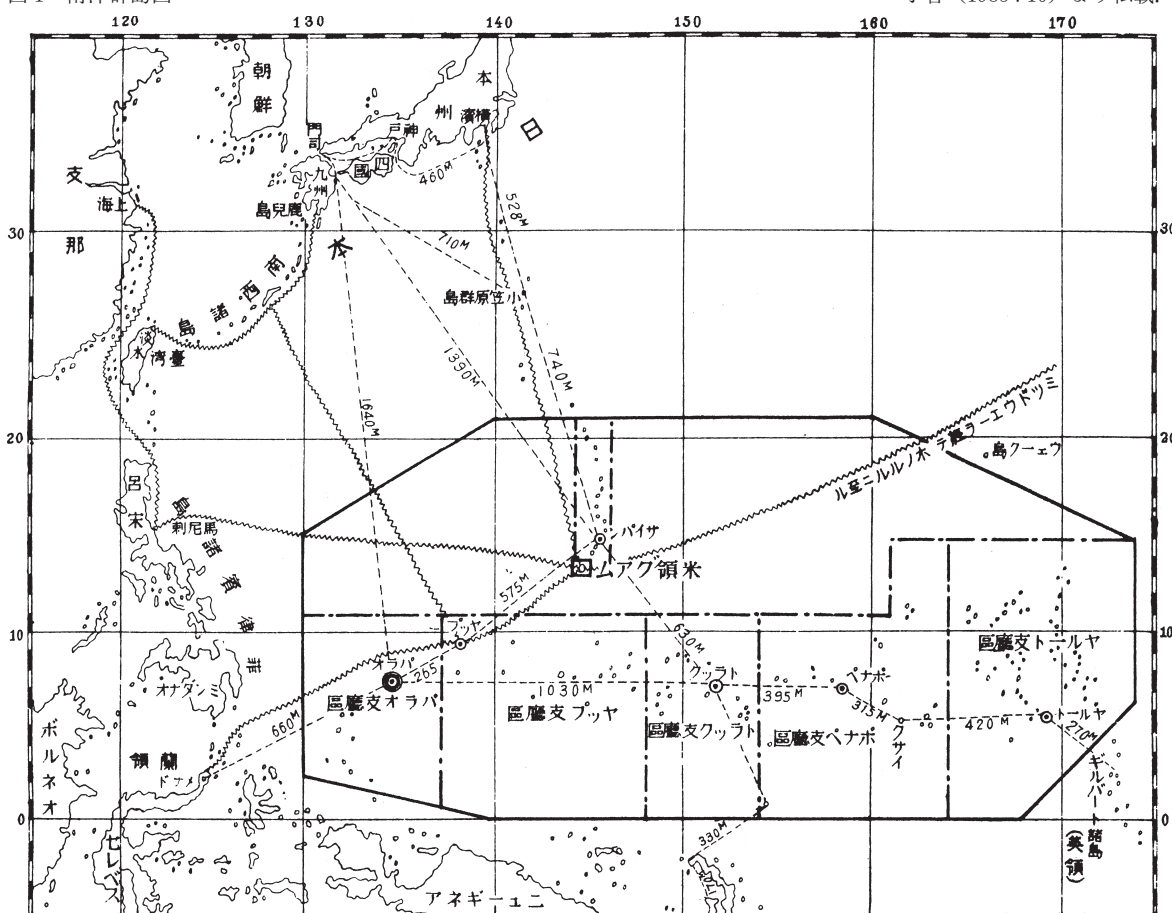
すなわち、日本はこの地域に対しては①帝国の構成部分として施政及び立法の全権を有し且つ必要な地方的変更を加えて帝国の法規を本地域に適用する事が出来るが、しかし、他方、②その住民の物質的及び精神的幸福並びに社会的進歩を極力増進するの責務を荷うの他、③奴隷の売買、強制労働の禁止、武器及び酒類供給の禁止、軍事的施設建設の禁止、信教の自由、宣教師の旅行・居住の許可などの制限を受け、④さらに、国際連盟理事会を満足せしむべき年報を同理事会に提出するの義務を負うた（南洋庁1934:25-28）。

2 委任統治領「南洋群島」

日本の南洋群島統治は、第1期軍政時代（1914年10月～1918年9月）、第2期民政時代（1918年9月～1922年3月）、そして第3期南洋庁時代（1922年4月～1944年7月）の3期に分かれる。第1期は1914年10月の日本の占領により、日本の統治が始まるが、12月には臨時南洋群島防備隊条例が發布され、本格的な軍政が始まった。司令部をトラック島に置き、全群島を分けて5管区（翌年6管区）となし、各区守備隊を配置し、各守備隊長をして軍政庁長として民政事務を掌握せしめた。これが軍政時代といわれるものである。第2期は1918年6月民政職員設置に関する勅令が公布せられた事に始まる。臨時南洋群島防備隊司令官の下に民政部を設け、新たに民政部長及事務官その他の職員を任命し、従来の軍政庁を改めて民政署となし事務官をもって民政署長にあて、各管内の民政事務にあたらしめた。そして、守備隊はもっぱら地方警備の任に当たり、ここに群島民政の端緒を開いた。ついで、南洋群島が国連による日本の委任統治地域になると、政府は施政制度を根本的に改革することになり、純然たる行政庁設置の準備として1921年7月民政部を司令部と分離し、これをパラオのコロール島に移転した。ここまでの第2期である。1922年3月勅令を以って、従来の臨時南洋群島防備条例が廃止せられ軍隊を撤退させると同時に、南洋庁を設置して第3期の南洋庁時代がはじまる。南洋庁のもとに南洋群島の須要の地に支庁をおいた。マリアナ群島にサイパン支庁、西カロリン群島にヤップ、パラオの2支庁、東カロリン群島にトラック、ポナペの2支庁、マーシャル群島にヤルート支庁を置いた（計6支庁）。支庁長は長官の指揮監督を受け、法律命令を執行し支庁内の行政を掌理した。また、サイパン支庁にはテニアン（1933年）、ロタ（1935年）の2出張所を置き、支庁の事務を分掌させた（外務省条約局1990:扉書き、石上1983:28-30）。

図1 南洋群島図

小菅（1985：10）より転載。



島内の日本人に対しては、1931年南洋庁令をもって、南洋群島部落規定を制定し、人口の多い地域に限って部落の制を設け公共事務を処理させた。部落には総代・副総代を置き、部落の事務を担任し部落を代表させた。また、部落に協議会を設け諮問機関とした。1934年段階の部落はコロール町（コロール島）、ガラパン町、南村、東村、北村（サイパン島）、テニアン町（テニアン島）、コロニヤ町（ポナペ島）の7部落であった（南洋庁1934：107-108）。

住民（「島民」と呼ばれた）には、1922年南洋庁令を以って、南洋群島島民村吏規定を公布し、各支庁管内を通じ、カナカ族に対しては総村長、村長を、チャモロ族に対しては区長、助役を置いた。これらは、旧慣による大酋長、酋長を支庁長が長官の認可を得て任命するもので、今夏、我々が調査した地域で見れば、パラオ支庁管内には総村長2、村長13人（総村長にして村長を兼務するもの2人）が置かれ、サイパン支庁管内には区長2、助役6が置かれた。総村長又は区長は支庁長の指揮監督を受け、地方行政に関する事務を補助執行するとともに、旧慣による職務を執行した（南洋庁1934：108-109）。

尤も民政期に入っても、勿論、軍（海軍）は南洋群島を南方進出のための拠点として、統治に関与し続けた。南洋群島は地域の安寧秩序を保つとの目的で、横須賀鎮守府の管轄下におかれたが（「南洋海軍区」と指定）、そもそも1921年に行政の中心地をトラックからパラオに移したのも、ニューギニアなどへの進出を考えてのものであったし、また、何よりも南洋群島はアメリカの南太平洋の拠点であるグアムを包囲し、さらにアメリカ軍の太平洋渡洋作戦、即ち西海岸→ハワイ→ミッドウェー→

グアム→フィリピンの進軍を阻止し、なおかつ日本本土防衛のための邀撃作戦の前線として設定されていた（今泉 2002: 559-560）。

南洋庁は朝鮮総督府、台湾総督府、樺太庁、関東庁と同様に、日本の「外地」の行政機関であった。しかし、植民地や租借地と異なる点は、委任統治、即ち国際連盟に代わって日本が統治を行う地域であったことである。南洋群島には憲法は施行されなかったし、台湾人や朝鮮人が日本国籍を与えられたのに対して南洋群島住民には与えられず、行政上「島民」の呼称が与えられた。しかしながら、日本の統治下にあるという事で、渡航の際には旅券が不要であることなど、日本の他の植民地、租借地と共通する側面もあった。すなわち、南洋群島は厳密な意味では植民地ではなかったが、統治の内実は植民地同様のものではあった（今泉 2002: 561）。

とくに、満州事変以後、「北の生命線；満州」、「海の生命線；南洋群島」と、日本は対内的には、南洋群島を植民地同様に扱う姿勢を公然と示し始めた。しかし、1933年に日本が国際連盟脱退を通告し、1935年に連盟を脱退した後も、委任統治についてはこれを継続した（第2次世界大戦終了まで）。そして、委任統治事項を従来どおり遵守する姿勢を示し、国際連盟の常設委任統治委員会にも行政年報を送付し、政府代表を派遣してその審査をうけた（今泉 2002: 563）。

しかしながら、こうした姿勢も1938年、国際連盟理事会が日中戦争について、戦争行為への制裁を採択すると、日本は行政年報の送付や審査についてはこれを中止した。そして、1936年のワシントン海軍軍縮条約の失効もあいまって、海軍は南洋群島に対して軍事施設の建設などを露骨に行いはじめ、施設建設の労働力として朝鮮人などの南洋移民が急増していく（今泉 2002: 563）。さらに太平洋戦争の開始とともに再び軍が南洋群島の統治の主導権を握っていった（今泉 1992: 50）。

3 南洋興発株式会社

最後に、このように位置づけられた南洋群島の開発にとって、あるいは後述する神社の創立にとっても、重要な役割を果たしたのが南洋興発株式会社（以後、南洋興発と表記）である。

南洋群島における唯一最大の製糖企業に成長した南洋興発は、1921年11月29日に設立された。南洋群島における製糖業は海軍統治期時代の1917年から始められたが、第1次世界大戦後の砂糖市場の暴落によって打撃を受けていた。これを立て直すために、政府の肝いりで朝鮮における国策会社である東洋拓殖会社から資金と人材を得、台湾の新高製糖会社の常務であった松江春次（専務、後1930年から取締役社長、1940年から取締役会長、1943年から相談役）を迎えて設立された。民間会社でありながら、半官半民の国策会社的な性格をもった会社であった（今泉 2002: 559）。

南洋興発は、南洋群島における製糖業を独占し大きく発展させることによって、政府の補助金に頼っていた南洋庁の財政基盤を確立させただけでなく、直営事業として燐鉱事業にも手を伸ばし、また企業投資を通じての多くの事業にも進出し、南洋群島の経済活性化と日本人人口の大量増加に大きく貢献した。さらには「外南洋」にも進出するなど、「北の満鉄、南の興発」と呼ばれるように、南洋群島の政治、経済、社会に巨大な役割を果たした（今泉 2002: 581-583）。

南洋興発の製糖業について今少し詳しくみておこう。南洋庁は1923年のサイパン島から土地調査事業を行い、そもそも土地私有観念のなかった南洋群島で、「無主地」とみなされた土地を官有地として編成、南洋群島全体の77%を官有地とした。そして、この官有地を南洋興発に貸し出し、その

権利地にしたのである。例えばサイパン島の既耕地の96%が南洋興発の権利地であったが、その8割が官有地であった。こうした、南洋庁の南洋興発優遇政策のもとで、南洋興発の製糖業はサイパン島、テニアン島、ロタ島、アギーカン島の4島で行われた。サイパン島では、約7,000町歩の耕作可能耕地のうち6,000町歩を借り受け、本社、第1製糖工場、第1酒精工場、1直営農場と5小作農場、牧場等を経営した。テニアン島では耕作可能地の約9,000町歩のほぼ全部を借り受け、第2・第3製糖工場、第2酒精工場および6直営農場と5小作農場を経営した。ロタ島では耕作可能耕地約5,000町歩を借り受け、1直営農場と1小作農場、第4製糖工場（後に酒精工場）、牧場を経営した（今泉2002:591）。

直営農場とは砂糖の原料となる甘蔗（砂糖きび）を会社自らが作るところで、小作農場とはそれを小作（耕作）人に作らせるところである。こうした農場で働く移民には、小作人（耕作人、蔗作人）、準小作人（準耕作人・1町農）、人夫（作業夫）の3種類があり、小作人は小作農場で5～6町歩ほどの土地を借り入れ、収穫の一部を小作料として会社になめるもの。人夫は直営農場で農業労働者として働き賃金を得る者、準小作人はその中間形態で1町歩ほどの土地を借り受け小作するとともに、直営農場や小作農場で働いて賃金を得るものである（上原2004:52-54）。

南洋興発の製糖業の発達とともに、こうした仕事につく移民たちが日本から大量に入ってくるが、中でも沖縄からの移民が多かった。南洋群島全体でも1922年段階では総人口約5万人の内、日本人は約3千人にすぎなかったが、1935年には総人口約10万人の内、日本人が約5万人と過半数をしめるようになり、この内の約6割を沖縄出身者が占めた。

今、旧南洋群島の人口の推移を示すと、表1のようになる。⁽¹⁾

	総 数	邦 人				島 民			外国人	内地人の内 沖縄県民
		総 数	内 地	朝 鮮	台 湾	総 数	チャモロ	カナカ		
1922	51,086	3,310	3,161	146	3	47,713	2,746	44,967	63	702
1923	54,358	5,203	5,121	82	0	49,090	2,847	46,243	65	2,391
1924	55,186	5,550	5,457	93	0	49,576	2,904	46,672	60	2,508
1925	56,294	7,430	7,330	98	2	48,798	2,953	45,845	66	3,894
1926	57,466	8,395	8,298	95	2	48,994	3,008	45,986	77	4,351
1927	58,816	9,979	9,831	147	1	48,761	3,048	45,713	76	5,132
1928	61,086	12,460	12,281	176	3	48,545	3,093	45,452	81	6,615
1929	64,921	16,202	16,021	179	2	48,617	3,184	45,433	102	8,289
1930	69,626	19,835	19,636	198	1	48,695	3,301	46,394	96	10,176
1931	73,027	22,889	22,663	225	1	50,038	3,472	46,566	100	12,227
1932	78,457	28,291	28,012	278	1	50,069	3,532	45,537	97	15,947
1933	82,252	32,214	31,900	313	1	49,935	3,687	46,248	103	18,212
1934	90,651	40,215	39,885	318	12	50,336	3,870	46,466	100	22,736
1935	102,537	51,861	51,309	546	6	50,573	3,725	46,848	103	28,972
1936	107,137	56,496	55,948	545	3	50,524	3,862	46,662	117	31,380
1937	113,277	62,305	61,723	579	3	50,849	3,705	47,144	123	34,237
1938	122,969	71,847	71,141	704	2	50,998	3,841	47,157	124	41,201
1939	129,104	77,257	75,286	1,968	3	51,723	4,036	47,687	124	45,701

II 「南洋群島」における神社の創立

1 全体の概観

海外神社の研究は、1990年代に一斉に各地域の研究成果が出されるなど大きく進展したが、事、南洋群島については大きく立ち遅れ、管見の限りではまとまった研究は行われてはいない（中島 2000: 47-48）。わずかに、今泉裕子が南洋群島の研究の中で触れているだけである。他に、資料としては小笠原省三の『海外神社史 上巻』と神社本庁の『第4回海外神社視察研修団 サイパン・パラオ戦没者慰霊の旅（報告書）』、それに佐藤弘毅の「南洋（群島）の神社一覧表」（佐藤 1997; 2004）があるだけである。

これらの、研究及び今回の現地調査をもとに、南洋群島の神社について簡単に押さえておこう。

表2は南洋群島における神社を、創立年代順に並べたものである。これは、佐藤弘毅の支庁別神社表（佐藤 1997: 211-213）を創立年代順に並べ替えたものであるが、佐藤の典拠したものは、拓務省の『南洋ニ於ケル神社ノ現況調』を基本にしたもので、1941年6月末の現況を押さえたものである。それ以降、1944年の夏に始まる南洋群島の米軍による占領までの間に創立されたものは載っていない。

全部で27社が創立され、内、官幣大社が1、無格社が26である。南洋群島において、最も早く創立された神社は1914年のサイパン島の彩帆神社であるが、1936年から1940年の5年間に15社と半数以上の神社がこの時期に建てられている。この点は他の地域との比較では、旧満州、旧中華民国の創立状況と似通っている。単年度でみた場合、最も多いのは1939年の8社であり、続いて1940年の4社である。

また、これを支庁別にみると、6支庁の内、一番多いのはサイパン支庁で14社と半数を超える。続いて多いのはパラオ支庁の6社で、この2支庁で74%をしめる。サイパン支庁の中で最も多いのは、テニアン出張所で6社、続いてサイパンの5社、ロタ出張所の3社である。

祭神で多いのは天照大神の24社で、後は、大国主命8社、豊受大神6社、貴船神5社、明治天皇5社等の順になる（佐藤 1997: 177）。

今回の調査は、サイパン、ロタ、テニアン、パラオ（コロール、バベルダオブ、ペリリュウ）の各島で行ったが、今回の調査で、佐藤の一覧表に載っていない神社として、サイパン島で2社（泉神社、〈仮称〉南洋コーヒー神社⁽²⁾）、テニアン島で1社（NKK〈南洋興発株式会社〉神社、但し日之出神社との関連がある可能性がある）、パラオ・バベルダオブ島で1社（ガラスマオ神社）の計4社を確認した。この事を含めて、各島毎にもう少し詳しくみておこう。

2 各島別の神社の創立

[サイパン]

南洋群島の玄関口であり、また南洋興発の本社（1942年3月パテオに移転）、製糖工場があったサイパンは南洋群島の中で、最も早くから多くの日本人が移住していた島である。

サイパンには、表2によれば、5社が創立されたことになっているが、この他に今回の調査で泉神社ともう1つの神社・（仮称）南洋コーヒー神社の2社の存在を確認出来た。

表2 南洋群島における海外神社創立年表

佐藤 (1997: 211-213) より作成.

No	支 庁 名	社格・神社名・様式	祭神名	創 立 年	境内地	氏子数	社 殿 等	鎮 座 地	氏 子 区 域	職 員 等
1	サイパン支庁	無格社 彩帆神社 神明造	天照大神 大国主神 香取大神	1914 (T 3) 年 11 月 3 日	6,427 (坪)	25,000 (人)	建坪 134.5 (坪)	サイパン島ガラパン町香取山	ガラパン町一円	(神職 亀川忠義)
2	パラオ支庁	無格社 アンガウル神社 小宮形平家建	天照大神	1917 (T 11) 年 11 月 27 日	20	2,139	本殿 4	パラオ諸島アンガウル島	アンガウル島一円	
3	サイパン支庁	無格社 カラベラ神社 神明造	天照大神 豊受大神	1919 (T 8) 年 10 月 17 日	6,000	2,887		サイパン島北村カラベラ	北村一円	
4	サイパン支庁	無格社 八幡神社	大抵比賣神 息長帯姫	1924 (T 13) 年 10 月 28 日	1,500	700	神殿 3, 拜殿 16	サイパン島東村	東村一円	
5	トラック支庁	無格社 都洛神社	天照大神	1926 (T 15) 年 7 月 9 日	398	3,825	本殿 1, 拜殿 12	トラック諸島夏島町	トラック島一円	
6	ヤルート支庁	無格社 マーシャル神社	天照大神	1928 (S 3) 年 11 月 10 日	477	563	本殿 1	ヤルート島	ヤルート一円	
7	ボナベ支庁	無格社 照南神社 神明造	天照大神	鎮座年 1930 (S 5) 年 4 月 25 日	600	7,700		ボナベ島コロロニヤ町	ボナベ島一円	
8	ヤップ支庁	無格社 弥津府神社 木造平家建	天照大神 明治天皇 大海津見大神 素盞鳴尊 天之水分神 国之水大神 志那津彦神 志那津姫神	1933 (S 8) 年 9 月 15 日	842	7,443		ヤツブ島コロロニヤ町	ヤップ島一円	
9	サイパン支庁 テニアン出張所	無格社 天仁安神社 流れ造	天照大神 明治天皇 貴船神	1934 (S 9) 年 11 月 23 日	6,219	15,488	本殿 9, 拜殿 14, 社務所 24	テニアン島ソニンソ市街	テニアン島	
10	サイパン支庁	無格社 南陽神社 入母屋造	天照大神 豊受大神 貴船神	1936 (S 11) 年 7 月 27 日	1,860	2,288		サイパン島南村アスリート	南村, アスリート一円	
11	ボナベ支庁	無格社 春来神社 神明造	天照大神	1936 (S 11) 年 10 月 17 日	300	662		ボナベ島春来植民地	植民地一円	
12	サイパン支庁	無格社 南興神社 春日造	天照大神 大国主神 総津主神 阿像女神	1937 (S 12) 年 11 月 29 日	1,053	3,795		サイパン島チャランカ	南洋興発会社員, チャランカ町一円	
13	サイパン支庁 テニアン出張所	無格社 和泉神社 流れ造	天照大神 豊受神 大国主神 貴船神	1939 (S 14) 年 7 月 5 日	3,325	1,952		テニアン島マルボ市街	マルボ市街並に第二農場	
14	サイパン支庁 テニアン出張所	無格社 羅宗神社 流れ造	天照大神 大国主神	1939 (S 14) 年 7 月 14 日	3,624	3,400		テニアン島チュエーロ	直営農場	
15	サイパン支庁 テニアン出張所	無格社 日之出神社 流れ造	天照大神 貴船神	1939 (S 14) 年 7 月 18 日	2,166	1,687		テニアン島アングー	第四農場	
16	サイパン支庁 テニアン出張所	無格社 住吉神社 流れ造	天照大神 豊受神 大国主神 貴船神	1939 (S 14) 年 7 月 28 日	1,500	1,430		テニアン島ソニンソ	ソニン第一農場	
17	サイパン支庁 テニアン出張所	無格社 橘神社 流れ造	天照大神 豊受神 大国主神	1939 (S 14) 年 8 月 3 日	1,818			テニアン島カーヒー	カーヒー並に第三農場	
18	パラオ支庁	無格社 朝日神社 木造平家建	天照大神 天照大神 大国主神	1939 (S 14) 年 9 月 3 日	8,000	630	本殿 14	パラオ島朝日村植民地	朝日村一円	
19	サイパン支庁 ロタ出張所	無格社 ロタ神社 木造平家建	天照大神 天照大神 高麗神	1939 (S 14) 年 10 月 2 日	4,500	3,594		ロタ島ソニン	ロタ島一円	
20	サイパン支庁 ロタ出張所	無格社 南光神社 木造平家建	天照大神 豊受大神	1939 (S 14) 年 11 月 2 日	3,897	200		ロタ島ルギー	ルギー一円	
21	ヤップ支庁	無格社 フハエス神社	天照大神	1940 (S 15) 年 4 月 7 日	383	562		ヤップ諸島フハエス島	フハエス島一円	
22	パラオ支庁	無格社 清水神社	天照大神 明治天皇	1940 (S 15) 年 6 月 1 日	10,362	108	本拜殿 13.2	パラオ本島清水村	清水村一円	
23	パラオ支庁	無格社 瑞穂神社	天照大神 金比羅権現	1940 (S 15) 年 9 月 1 日	800	350	本拜殿 16	パラオ本島瑞穂村植民地	瑞穂村一円	
24	パラオ支庁	官幣大社 南洋神社 神明造 大島造ヲ規調トス	天照大神	1940 (S 15) 年 11 月 1 日 列格年 1940 (S 15) 年 11 月 1 日	96,248	131,037		パラオ島コロル町アルミス高地	南洋群島一円	宮司 宮地威夫 禰宜 三嶋 出仕 河合 (宮司 別所猶一)
25	サイパン支庁 ロタ出張所	無格社 大山祇神社 木造平家建	大山祇命		700	400		ロタ島サバマニラ高地	サバナー一円	
26	パラオ支庁	無格社 ベリリュウ神社 神明造	天照大神 明治天皇		518	800		パラオ諸島ベリリュウ島	ベリリュウ島一円	
27	ボナベ支庁	無格社 明治神社 流れ波風造	明治天皇		210	2,657		ボナベ島マタラニーム村	マタラニーム一円	

サイパンで一番早く、そしてそれは同時に南洋群島で一番早く創立された神社は南洋群島の玄関口、後に、南洋随一の繁華街になり「南洋の東京」と呼ばれた、ガラパン町に1915年11月3日に創立された彩帆神社である。第1次世界大戦時、南遣支隊の軍艦香取が南洋群島の最後に占領したのがサイパン島であるが、「ドイツ軍の見張り所たりし高台に日章旗高く掲げられしが10月14日午前8時15分なりしといふ。かくて其高台に香取艦より香取大神の神霊移され南洋鎮守の基を開けり、よって此地を香取山といひ社を香取神社と称し、我軍守備の中心地となれり」（神社本庁1982:15）。この香取神社が後に彩帆神社と改められたのである。

後は、第1次世界大戦後にカラベラ神社（1919年10月）、八幡神社（1924年10月）の2社、そして1930年代後半以降に南陽神社（1936年7月）、南興神社（1937年11月）、そして泉神社と創立された。泉神社の創立年代は不明であるが、現存する鳥居には「昭和十八年三月建之」とある。

サイパンの神社は部落ごとに建てられたようである。先に見たように、南洋庁は南洋群島に日本人人口の稠密な地域が出来てきた事を理由に1931年部落を設定し、公共事務を補助させることにした。

サイパン支庁では、南洋興発のいくつかの農場を併せて行政単位とした南村、東村、北村、泉村の他に、ガラパン町、チャランカ町の4村2町があった（今泉2002:568-569）。（仮称）南洋コーヒー神社を除けば、サイパンの6社は、表2の、氏子区域から見て、結果的にこの6つの部落に対応して建てられたことになる。すなわち、ガラパン町（彩帆神社）、チャランカ町（南興神社）、北村（カラベラ神社）、泉村（泉神社）、東村（八幡神社）、南村（南陽神社）である。（表3、図2参照）

[テニアン]

テニアンは日本の統治下に入った時期には、ほぼ無人の地とも言うべき島であったが、南洋興発のテニアン開発とともに人口（日本人）が急増する。1926年にほぼテニアン全島が南洋興発のものになり、1930年にはテニアン製糖工場も落成、操業を開始する（沖縄県教育委員会2002:75）。

テニアン島には、表2の如く6神社が創立された事になっている。今回の現地調査でもこの6社の存在を確認したが、この他に1社NKK（南洋興発株式会社）神社の存在を確認した。

テニアンで最も早く創立されたのは、サイパンより遅く、1934年11月、島の中心地ソンソン市街に建てられた天仁安神社である。ソンソン町はテニアン島における唯一の部落で、天仁安神社は島全体を氏子区域とする、島の総鎮守としての性格をもっていた。

以下、羅宗神社（1939年7月）、日之出神社（同）、住吉神社（同）、和泉神社（同）、橘神社（1939年8月）と1939年に5社が創立されている。今回、新たに確認したNKK（南洋興発株式会社）神社は創立年は不明であるが、一の鳥居には1941年という年が刻まれている。

テニアン島の神社は天仁安神社を除けば、何れも南洋興発の開拓地（農場、後に行政組織として再編）に建てられた神社である。住吉神社は第1農場、和泉神社は第2農場（中心街マルボ）、橘神社は第3農場（中心街カーヒー）、日の出神社は第4農場、そして羅宗神社は直営農場の総鎮守として創立されたものである（今泉2002:676）。今回新しく確認したNKK神社は日の出神社と距離的にも500米も離れておらず、しかも残存しているこの神社の鳥居や燈籠には日之出神社の氏子区域と同じ「第四農場蔗作人一同」の文字が刻まれている。両社の関係、異同については今後の課題である。（表4、図3参照）

[ロタ]

南洋興発が本格的にロタに進出したのが、1932年で（沖縄ロタ会 1990:163）、この頃から人口（日本人）が増え始め、さらに1935年の製糖工場完成（沖縄ロタ会 1990:28-29）と前後して急増する。⁽³⁾

ロタ島には、表2の如く3社が創立されている。今回の調査でも、この3社以外には確認できなかった。最初に創立された神社はロタ島の中心街ソソソに建てられたロタ神社で、1939年10月にロタ島一円を氏子区域とする、ロタ島の総鎮守として建てられている。

次に同年11月にルギーに南光神社が建てられたが、ここは南洋興発の直営農場があった地域である。もう1つの大山祇神社は創立年代は不明であるがサバナ高地に建てられた。この神社はマニラ神社とも呼ばれたが、ここは南洋興発の燐鉱山（1936年）があった地域で、したがってまたその祭神は鉱山の神・大山祇命となっている。（表5、図4参照）

[パラオ]

パラオ支庁には、表2の如く6つの神社が創立されている。この他にガラスマオ神社の創立が文献によって確認されており（神社本庁 1982:14）、これは今回の調査でもその存在を確認した。島ごとでは、コロール島に1社、バベルダオブ島に4社、ペリリュウ島に1社、アンガウル島に1社である。最も早く創立されたのは、アンガウル島のアンガウル神社で第1次世界大戦中の1917年11月に創立されている。次に1939年9月に朝日神社、1940年6月に清水神社、同年9月に瑞穂神社と、3社がいずれもバベルダオブ島に創立されている。さらに後述する官幣大社南洋神社が1940年11月にコロール島に建てられた。バベルダオブ島のガラスマオ神社、ペリリュウ島のペリリュウ神社は創立年代が不明である。⁽⁴⁾

一番多く建てられたバベルダオブ島の神社について、もう少し詳しくみておこう。

南洋庁の土地政策は、南洋興発のところで見たように企業者に土地を貸与して、企業者をしてその利用をなさしむる方法（土地貸与の方法）の他に、やや遅れて、小農の移住を奨励し、未開地を無償で貸与し、開墾成功後これを譲渡して自作農を育成する方法（土地譲渡の方法）を持っていた。後者は、パラオ支庁、ポナペ支庁の一部で実施されたが、植民地区画（指定開拓地）を選定し、特定の条件を満たす農民を受け入れて開墾を進めた（上原 2004:38-47）。

入植者の出身地を見ると、北海道が多く、又、栽培される主な作物はパイナップルやキャッサバ（タピオカ）等と、これまで見たサイパン、テニアン、ロタなどの沖縄出身者中心の甘蔗栽培の移民（小作、農業労働者）とは多くの点で対照的であった（今泉 2002:615-619）。

開拓地の選定は1924年から始まり、バベルダオブ島には4箇所が選定された。まず、1925年には瑞穂村（アイライ村のアイライ指定開拓地、1943年現在で67戸）、1927年には清水村（マルキョク村とカイシャル村にまたがるガルドグ指定開拓地、同102戸）と朝日村（アルモノグイ村のガルミスタン指定開拓地、同94戸）、そして、1939年に大和村（アルモノグイ村とガスパン村にまたがるガバドール指定開拓地、同78戸）の4村である（今泉 2002:617、小菅 1978:204）。

そして、神社はこの村々に創立された。すなわち、朝日神社（朝日村）、清水神社（清水村）、瑞穂神社（瑞穂村）である。一番遅く指定された大和村には独自の神社は創立されなかったようである。但し、後述するように、官幣大社南洋神社の仮殿が1944年に設けられた。

今回、これらの神社跡地には赴く事は出来なかったが、別の神社跡地を確認する事ができた。それは、ガラスマオ村に建てられたガラスマオ神社である。創立の経緯やこの地が開拓地に指定されたのか等については不明であるが、この付近には、燐鉱とならぶ南洋群島の重要鉱物の1つであるボーキサイトの鉱山があった（南洋アルミニウム鉱山〈株〉、1937年設立）。（表6、図5参照）

3 官幣大社南洋神社

パラオに建てられた官幣大社南洋神社の創立について今少し詳しく見ておこう。

南洋群島の総鎮守としての神社を創建しようという計画は、幾度か計画されたが実現しなかった。しかし、日中戦争を契機としてついにその具体化が始まり、1940年の紀元2600年の紀元節をトして、天照大神を祭神とする官幣大社南洋神社がパラオ諸島コロール島アルミズ高地に建てらる旨の聖旨が出され（2月1日）、2月13日に拓務省告示で正式に祭神、社格が決定した。また、鎮座祭（11月1日）、例祭日（10月17日）も告示された（外務省条約局1990:41）。

南洋庁内に臨時造営事務所を設置、国費並びに奉賛会費をもって突貫工事を行い、同年の11月1日に鎮座祭を執行した。神社建設の過程では、群島全島の人々が資材や労働力を提供した（今泉2002:678）。

この、南洋神社創立の背景は「南洋群島は……今や各種産業振興し帝国の南方に対する経済的、文化的発展の前進拠点として極めて重要な地歩を占むに至ったので」（小磯拓務大臣謹話、小笠原1953:299-300）、「南洋群島は愈々皇土としての地歩を不動ならしめ、又、民族南進の拠点として全南洋の中心たる第一歩を踏み出した」（近藤南洋庁長官挨拶）と言うものであり、したがって又、この神社の創設を契機に「大東亜新秩序の聖業に邁進」せねばならないという事であった（今泉2002:677-678）。

しかし、こうして創建された神社であったが、創立3年半にして（1944年3月）米軍の来襲を受けるようになった。そこで、バベルダオブ島の大和村に仮殿を建設、1944年11月遷座した。

1945年5月17日、南洋神社は米軍機の至近弾により、本殿、末社金刀比羅神社並びに祭器庫等が大破、そのまま終戦を迎えた。そして、9月11日、米軍の了解を得て、日本の工兵隊の手で「奉焼」された。また、大和村の仮殿も翌46年1月、「御神霊御離昇」の儀式を行い、仮殿も「奉焼」した。尚、霊代は米国側の了解を得て、日本に持ち帰り宮内庁に届けられた。

また、バベルダオブ島の4つの神社も、南洋庁の指示により南洋神社に準じて1945年12月昇神並びに社殿奉焼の儀式を行い、霊代のみ埋納した（神社本庁1982:13-15）。

4 南洋群島における神社の果たした役割

この、南洋神社の創立の翌年、南洋庁は「南洋群島神社規則」を公布し、神社の創立、設備、崇敬者総代会、神職などについて細かく規定した。これまで、仏教、キリスト教、神道（教派神道）等の宗教については1931年の8月に「布教規則」を出して、それらの保護・監督を行っていたが、戦前は宗教ではなく国家の祭祀と位置付けられていた、神社（国家神道）については、実は何ら拠るべき規則を持っていなかった⁽⁵⁾。すでに、前年、南洋神社の創立が決まった後、拓務省は「樺太及南洋群島における官幣大社及び県社以下神社祭式及神職齋戒に関する件」及び「同神社祭式に関する件」を出

南洋庁 (1993 a—1993 d) より作成.

	総 数	邦 人				島 民			外国人
		総 数	内 地	朝 鮮	台 湾	総 数	チャモロ	カナカ	
1922	4,910	1,944	1,804	137	3	2,960	2,350	610	6
1925	7,896	5,251	5,168	83	0	2,639	1,863	776	6
1930	13,239	10,315	10,196	119	0	2,915	2,066	849	9
1935	23,859	20,649	20,397	251	1	3,194	2,337	857	16
1939	27,525	24,330	24,033	296	1	3,179	2,349	830	16

小菅 (1985:11), 今泉 (2002:587) をもとに作成.

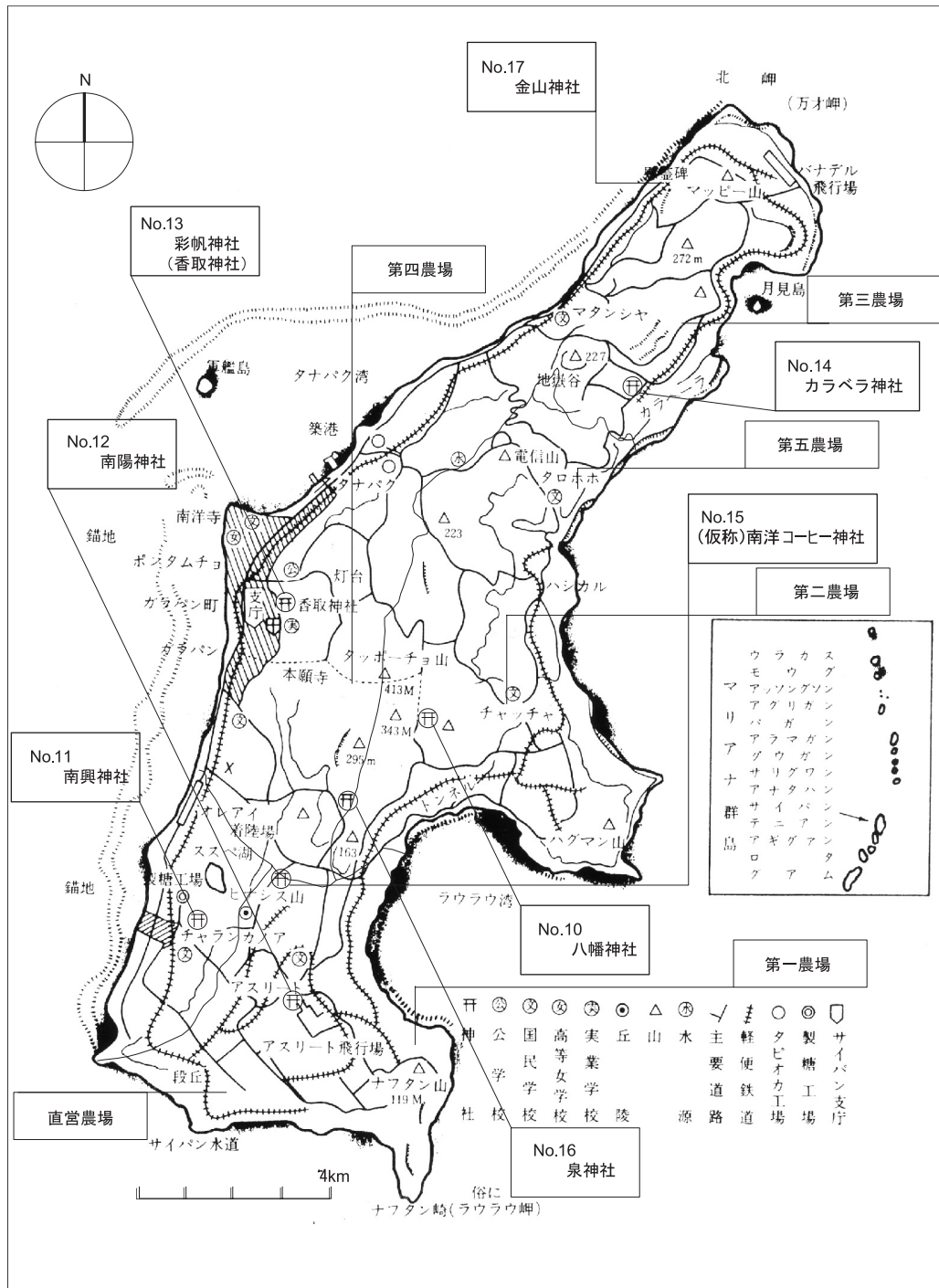


表 4 テニアン島人口推移 南洋庁（1993 a—1993 d）より作成.

	総 数	邦 人				島 民			外国人
		総 数	内 地	朝 鮮	台 湾	総 数	チャモロ	カナカ	
1922	102	6	6	0	0	96	13	83	0
1925	199	19	19	0	0	180	169	11	0
1930	5,314	5,271	5,227	44	0	43	41	2	0
1935	13,975	13,951	13,919	32	0	24	23	1	0
1939	15,428	15,411	15,185	226	0	13	7	6	4

図 3 テニアン島 小菅（1985：16），今泉（2002：589）をもとに作成.

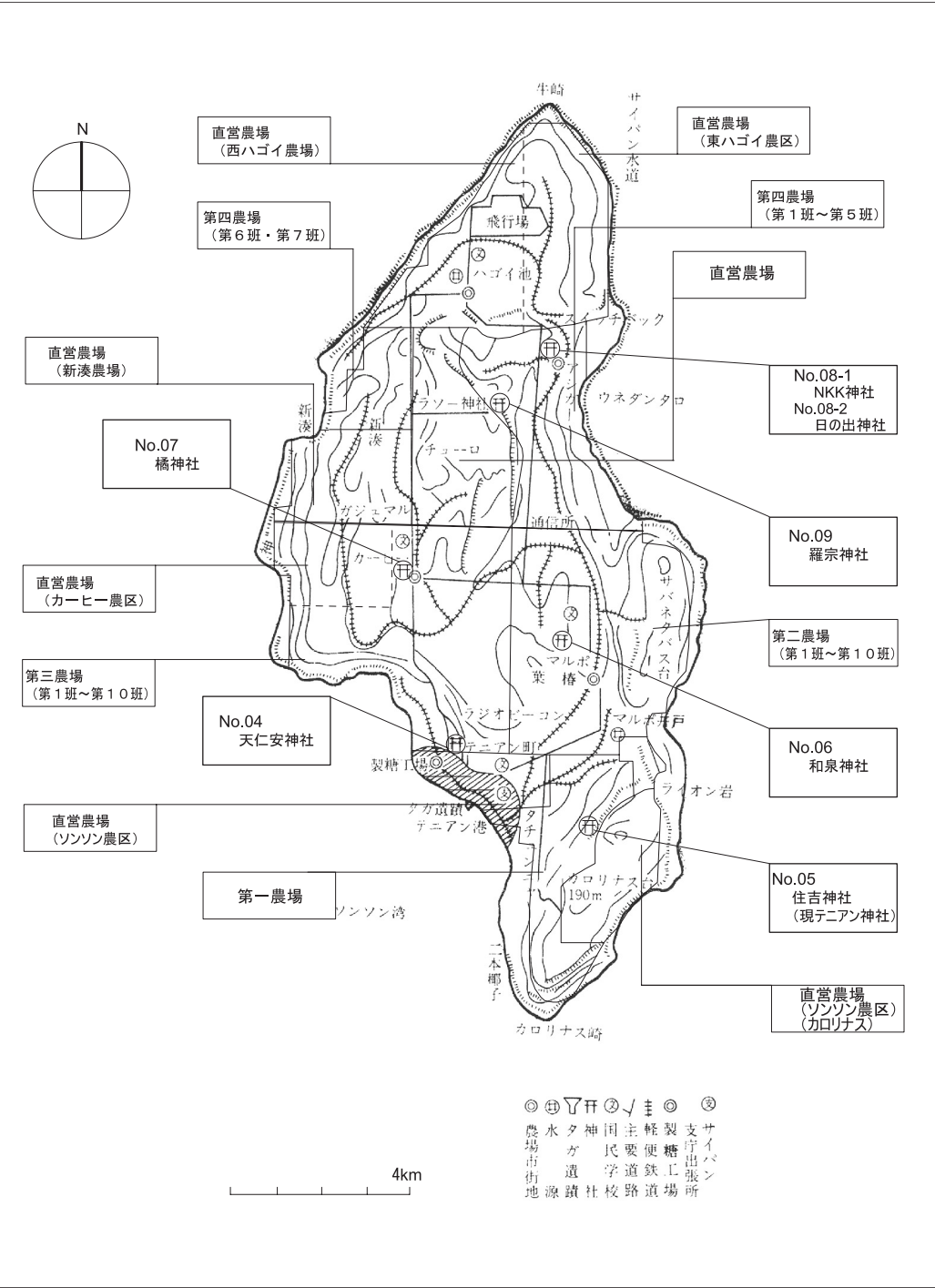


表5 ロタ島人口推移

南洋庁（1993 a—1993 d）より作成.

	総 数	邦 人				島 民			外国人
		総 数	内 地	朝 鮮	台 湾	総 数	チャモロ	カナカ	
1922	709	45	38	7	0	662	626	36	2
1925	515	26	23	3	0	487	484	3	2
1930	699	53	48	5	0	644	639	5	2
1935	5,806	5,016	4,899	115	2	788	782	6	2
1939	4,361	3,589	3,525	64	0	770	768	2	2

図4 ロタ島

小菅（1985：17）をもとに作成.

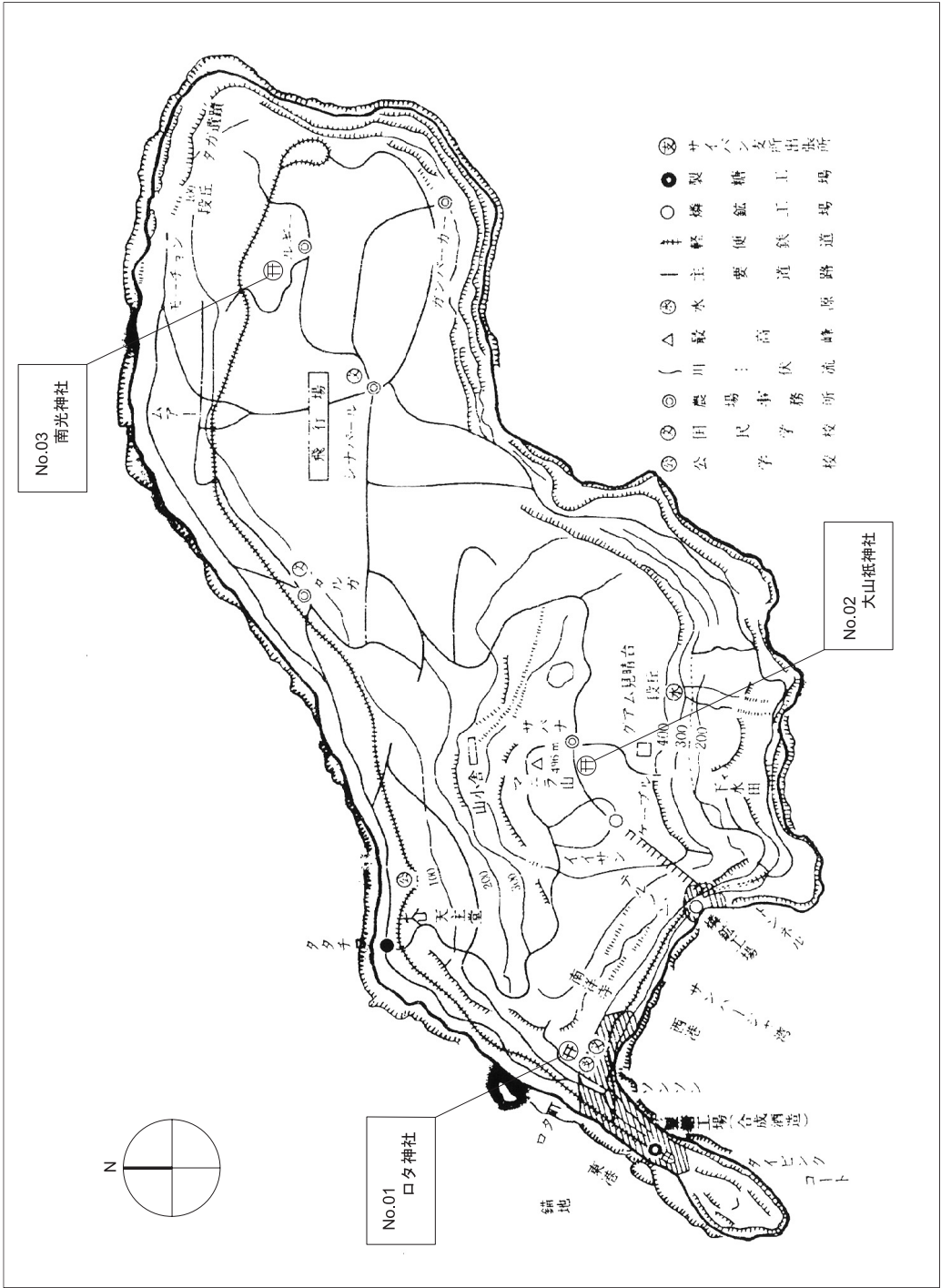


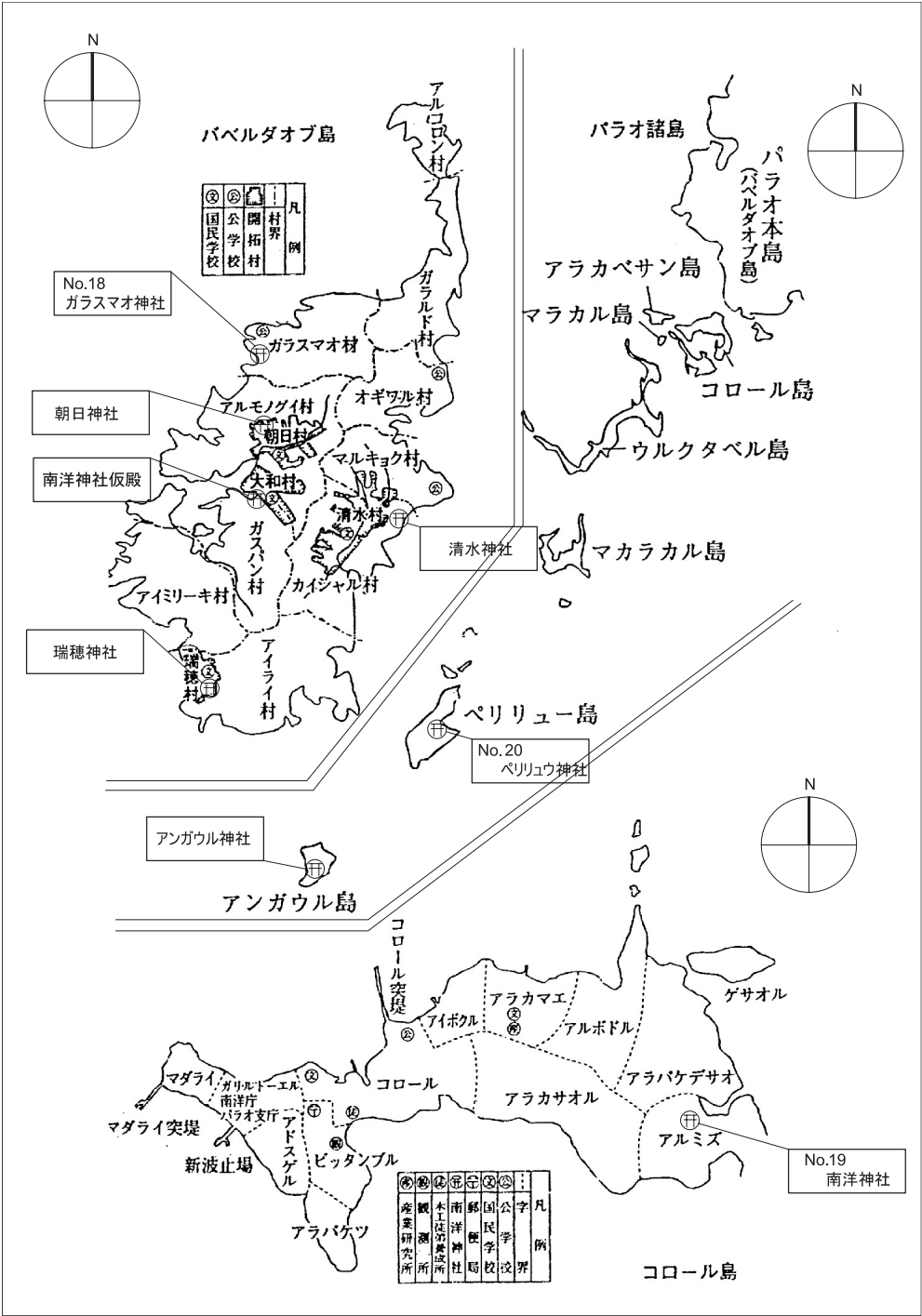
表6 パラオ・バベルダオブ島人口推移

南洋庁（1993 a—1993 d）より作成.

	総 数	邦 人				島 民			外国人
		総 数	内 地	朝 鮮	台 湾	総 数	チャモロ	カナカ	
1922	3,090	32	32	0	0	3,054	54	3,000	4
1925	2,821	100	99	1	0	2,718	53	2,665	3
1930	3,049	193	190	3	0	2,853	68	2,785	3
1935	3,794	726	700	25	1	3,067	77	2,990	1
1939	7,498	4,060	3,638	421	1	3,430	85	3,345	8

図5 パラオ諸島

今泉（2002：618）をもとに作成.



して、南洋群島の神社の祭式等については、内地の法令を適用する事を定めたが、それらと、この「神社規則」の公布によって初めて南洋群島の神社も、国家神道下の神社として位置付けられたのである。こうした中で、官幣大社南洋神社を除く、島内の全ての神社も無格社というものであったが、初めて内地の社格制度によって格付けされたのであった（外務省条約局 1990 : 41-50）。

これまでもっぱら氏神として、移住者の安心立命や、村（農場）の永続を祈願し、また1年でもっとも楽しい慰安娯楽の場であった南洋群島の神社も、ここに、もっぱら国家・国体観念を涵養する国家神道の施設として位置付けられたのである（居留民設置（奉斎）神社の政府設置（奉斎）神社への包摂である。この点については、中島 2000 : 58-59 参照）。

他方、こうした神社と多くキリスト教徒であった島民の関係については、未だ十分な資料は得られていない。島民の「同化」や「皇民化」に最も大きな役割を果たしたのは学校教育であり、公学校⁽⁶⁾の教育を通じて、国旗掲揚、宮城遙拝、日本の儀式祭礼、修身、日本語教育などが徹底された（今泉 1992 : 46）。

この中で、国家神道と位置付けられた神社がどのような役割を果たしたのか、他の植民地で徹底された神社参拝等がどのようにおこなわれたのか。

ロタ島では、当時を知る現地住民2人から聞き取りを行う事ができた。教育勅語の出だし部分「朕思うに、我が皇祖皇宗……」を誦んじて見せた一人は、ロタ神社の祭礼の楽しい思い出を語ってくれたが、もう1人は年少だった事があるのか、神社に行った経験を持っていなかった。また、ロタ島では、1933年に中心地であったソンソンから島民をタタチョに強制移動させて、ソンソンを完全な日本人街にしたが（沖縄ロタ会 1990 : 135）、このタタチョには神社は創られなかった。

こうした、島民と神社の関係を考える場合、南洋群島が他のどの植民地とも大きく異なる性格をもっていたことには注意されねばならない。

先に、見たように南洋群島は国際連盟の委任統治領として、日本に対して様々な制限、義務を課していたが（委任統治條項）、その1つに信教の自由の保障があった（第5条）。委任統治條項第5条には次のように規定されていた。「公の秩序又は善良の風俗の維持に関する地方的法規に反せざる限り、受任国は本地域内に於て良心自由並各種礼拝の自由執行を確保し又連盟国の国民たる一切の宣教師が其の職務を行う為、本地域内に至り旅行し又は居住する事を許すべし」。

そして、これも前に述べたように、日本のこうした条項の履行状況を報告する年報は毎年連盟に提出せられ厳しいチェックを受けた。それは、日本が連盟を脱退した後も1938年まで続けられたことも、前に述べた通りである。

また、これだけではなく日本はヴェルサイユ条約を批准せず、国際連盟に加盟しなかった米国とも1922年7月に「〈ヤップ〉島及他の赤道以北の太平洋委任統治諸島に関する日米条約」を結んで、この点に関する更に詳細な取決めを結んでいた。「日本国は公の秩序及善良の風俗に反せざる限り良心の自由及各種礼拝の自由執行を右諸島に於て確保すべし。斯る一切の宗教の米国人宣教師は右諸島に入り且右諸島内に旅行し及居住し並右諸島内に於て財産を取得し及占有し宗教的建物を建設し及学校を開設するの自由を有すべし。尤も日本国は公の秩序及善政を維持するに必要なべき監理を行い且右監理上必要な一切の措置を執るの権利を有するものとす」（南洋庁 1934 : 29-31）。

また、この南洋群島は、スペインそしてドイツに至る数百年の統治の中で、島民の間にキリスト教

が深く浸透していた。海軍統治時代、日本はキリスト教およびその布教者である外国人の排除を試みたが、南洋庁時代に入り、その布数は再び活発化していった。新教（プロテスタント）ではドイツ、アメリカからの宣教団の他に日本からも日本組合教会の伝道団が派遣されてきた。旧教（カソリック）ではスペインからの宣教団によって布教が行われた。1934年段階では、教会と布教所併せて148、布教者が191人、信者は約3万5千人、在住者人口の27%を占めていた（今泉2002:673）。但し、この%は、日本人を含めての数字であり、島民だけで見ると、例えばサイパン島では島民の100%近くがキリスト教（カソリック）信者であった。

日本は、「島民の概して性温順なるは主として基督教布教の結果」（南洋庁1934:172）なりと、島民統治にとってその有用性を認めていた。また、先に見たように、国際連盟でも日本がキリスト教の活動を保護しているか否かの議論が度々行われ、日本は積極的に保護していると主張し続けた。

こうした事もあって、キリスト教の抑圧は目立った形では行われなかったようである。先に南洋神社の創立や「神社規則」の公布といった、国家神道政策が1940年から41年といった、他の植民地に比較すれば、随分遅く展開されたのも（他の地域では1930年に入って、遅くともその後半にはそれは展開されていた）、そうした事が影響しているのかも知れない。

しかし、太平洋戦争が始まると、こうした関係も崩れ「ボクらはカトリック教徒だけど、毎朝、サイパン神社にお参り行ってから学校に通った」（大野2001:114）という状況が生まれていったようである。また、外国人宣教師の中には送還させられた者もあり、さらには、日本兵によって殺害された者もいた（今泉2002:674; 石上1983:177-181）。

5 神社の「再建」

戦前、日本の勢力圏内に建てられた神社は今日、確認できるものだけでも約1,600余社に及ぶ。日本の敗戦と共にこれらの全ての神社はその機能を停止し、以後その神社跡地は公園や他の宗教施設等に「改変」されたり、あるいはそのまま「放置」されたままになっているものが多い。ところが、この南洋群島に建てられた神社のみ、そのいくつかは、新しく「再建」とされるという特徴をもっている。詳しくは、拙稿（中島2005）で分析しておいたので、それを参照してほしいが、南洋群島に建てられた神社の内、6社が「再建」されている。

1つはテニアン島の天仁安神社（旧住吉神社跡地に）であり、2つはサイパン島の彩帆神社（彩帆香取神社として）であり、3つは同島の八幡神社（彩帆八幡神社として、以上の三つは現北マリアナ諸島連邦）、4つはコロール島の南洋神社、5つはペリリュウ島のペリリュウ神社（ペリリュウ神社として）、そして6つめにはアンガウル島のアンガウル神社（以上の三つは現パラオ共和国）である。

再建の具体的様子は、後述の「神社跡地の調査」及び後掲の調査表等を参照していただきたいが、これらの神社はいずれも1980年代以降に「再建」されている事、また、「再建」の主体になったのは日本の一部の神社関係者であり、とくに「清流社⁽⁷⁾」という団体のかかわりが大きいという事である。

「再建」の具体的経過についての詳細は今後の課題であるが、「再建」の要因としては日本側の「大東亜戦争⁽⁸⁾」に対する思い、またそこでの戦死者（「英霊」）に対する慰霊や顕彰といったものがあり、また現地政府にとっては、日本人観光客（戦没者慰霊団を含む）の積極的誘致政策⁽⁹⁾というものがあって、この2つの要因が複雑に絡んで「再建」されているようである。

III 神社跡地の調査

1 調査の概要

今回の南洋群島における旧神社跡地調査は、限られた日数から、対象地域をロタ島、テニアン島、サイパン島、パラオのコロール島、バベルダオブ島、ペリリュウ島とした。

表2の如く、佐藤論文に報告されているこの6つの島にある神社の総数は20件で、全体の74%にあたる。現地調査にあたって、予め各事例ごとの戦前の写真、絵葉書、図面と、位置を確認できる当時の市街地図を準備する作業を行うとともに、現況の地図等は現地で入手することとした。

調査期間は2004年8月7日から16日までの9泊10日である。参加者は中島三千男、大坪潤子、サイモン・ジョン、富井正憲の合計4名である。調査にあたっては昨年同様に現地に位置する博物館や歴史保存館の研究者と緊密な情報交換を行い、可能な限り現場に立ち会っていただくと共に、日本からの墓参団・慰霊団等の世話役をしていて土地勘のある現地案内者に加わっていただき、位置の確定にも配慮した。

調査シートをもとに跡地を確定し、戦前・戦後の名称・所在地・沿革・施設内容・配置・周辺環境・ヒアリング・所見・写真・地図・図面チェックを行った。

調査した神社の内訳を島別にあげると、ロタ島のロタ神社、大山祇神社（マニラ神社）、南光神社の3事例、テニアン島の天仁安（テニアン）神社、住吉神社、和泉神社、橘神社、日之出神社、（仮）NKK神社、羅宗神社の7事例、サイパン島の八幡神社、南興神社、南陽神社、彩帆神社、カラベラ神社、（仮称）南洋コーヒー神社、泉神社、金山神社（神社標のみ残存）の8事例、バベルダオブ島のガラスマオ神社、コロール島の南洋神社、ペリリュウ島のペリリュウ神社の合計21社である。それらを各島ごとに位置を地図にプロットし、各神社の調査シートごとに、実測図面と写真を添付資料としてまとめた（但し、紙数の関係から、南光神社・南陽神社・金山神社等については省いた）。

次に南洋群島における各神社の戦前と戦後の調査結果の内容を調査順に従って示す。

なお、南洋群島の神社跡地の調査の先行事例として、神社本庁が1982年3月にサイパン島とコロール島で行ったものがある（神社本庁1982）。ここでは、コロール島1、サイパン島4の計5つの神社跡地の現況報告がなされている。

2 ロタ島

【無格社 ロタ神社】（調査表 No. 南洋―01, 写真, 図面）

ロタ神社はロタ島ソンソン（村の意味）の大きな崖下のトンガケーヴと呼ばれる洞窟前の、街に開いたわずかな高台に位置する。本殿の方位は南西向きである。境内の敷地は4,500坪、木造平屋建てである。創立年は1939年10月で、祭神は天照大神、大国主神、高麗神、氏子の区域は島一円を対象とし、その数は3,594人である（境内面積から氏子区域までの各神社の基本的情報は以下全て佐藤1997: 211-213に依る）。

『ロタ住宅地②』（沖縄ロタ会: 1998）によれば1944年6月11日ロタ全土爆撃炎上の記事があるが、現地の70歳の古老の記憶によると1946年にはまだ建物、鳥居共にあったとのことである。しかし今は現存せず、本殿と拝殿の基壇が2つ残るのみである。現在土地は政府の所有で、旧境内一帯は観光

名所の洞窟の前面広場になっている。その一角に現存する本殿基壇上にはキリスト像を安置する方形屋根の本造小建物1棟と、拝殿基壇位置には祈禱のための切妻屋根カラー鉄板葺あずまや1棟が新しく建つ。旧境内は真っ赤な火炎樹と呼ばれる南洋桜の大本木が茂り、神社がキリスト教施設に変わっただけで、宗教的な雰囲気は続いている。現在は観光地となっているトンガケーヴと呼ばれる後ろの洞窟はその昔トンガ王国の難破船が避難したことに由来するが、もともと1600年代はキリスト教宣教師が住んでいたと伝えられ、今も1年に一回お祭りが催される宗教的に縁の深い場所である。崖の上には大きな十字架が設置されている。

【無格社 大山祇（マニラ）神社】（調査表 No. 南洋―02, 写真, 図面）

大山祇（マニラ）神社はロタ島サバナマニラ高地に位置する。マニラ山（496 m）はロタで最も高い山である。境内の敷地は700坪、木造平屋建てである。視界は開けて、展望はすばらしい。創立年は不明、祭神は大山祇命、氏子の区域はサバナー円を対象とし、その数は400人である。大山祇命は山の神様であり、鉾山との関係が深い。このマニラ山も隣山の産出場所であったことに由っている。このためにマニラ神社とも、大山祇神社とも呼ばれる。現存する建物はないが、5,6メートルもある2つの大きな自然岩の前に本殿の基壇だけは残っている。本殿はほぼ南向きである。安山岩の2つの岩は圧倒的な存在を示している。本殿跡に立つと岩と岩の隙間から遠くを見透すことができる。周囲に人家らしきものはない。

1973年9月に、この境内跡地に「平和の礎」が設置され、更に1997年にはコンクリートのあずまや1棟、トイレ施設、バーベキュー施設が新設されて、日本からの慰問団が利用すると共に、島の人々も平和記念公園として親しみ利用している。

【無格社 南光神社】（調査表 No. 南洋―03, 写真, 図面）

南光神社はロタ島ルギーに位置する。ここは、南洋興発の直営農場があった所で、境内の敷地は3,897坪、木造平屋建ての報告有り。

創立年は1939年11月、祭神は天照大神、豊受大神、氏子の区域はルギー一円、その数は200人である。現地で入手した地図（沖縄ロタ会：1998）に確かに「ルギー神社」の表記が確認でき、その地図を頼りに現場に行って古老にヒアリングを行なうもジャングル化していて、場所を特定することが出来ず、日本人の住宅跡を確認しただけであった。

3 テニアン島

【無格社 天仁安神社】（調査表 No. 南洋―04, 写真, 図面）

天仁安（テニアン）神社はテニアン島ソンソン（村の意味）市街に位置する。境内の敷地は6,219坪、流れ造りで、本殿9坪、拝殿14坪、社務所24坪からなる。創立年は1934年11月で、祭神は天照大神、明治天皇、貴船神、氏子の区域はテニアン島一円を対象とし、その数は15,488人である。

1938年～41年のテニアン町中心部の地図をもとに位置の確定に努めたが、特定できるものは発見できなかった。建て直した新しい教会の以前の建物へのアプローチ部分に燈籠様のものが2つが残っているのと、現在学校が建っている後ろのグラウンド部分（当時の地図によると全てがグラウンドで

あったが)にコンクリートの鳥居柱の一部分と思われるものが放置されているのを確認できた。尚、テニアン島の歴史的文物保存館で入手した終戦直後の一写真は、「米軍の爆撃により倒壊しかかったテニアン神社の鳥居」とタイトルから読み取れるが、戦前の神社の写真と比較すると鳥居の様式や参道部分の階段有無に差異が見られるので、今後の検討が必要である。神社跡地は学校と教会が位置し、町の中心市街の文化的な地域にすっかり変容している。

【無格社 住吉神社】(調査表 No. 南洋―05, 写真, 図面)

住吉神社はテニアン島ソンソン(村の意味)のライオンロックと呼ばれる高台中腹の眺めのよい場所に位置する。境内の敷地は1,500坪、流れ造りである。創立年は1939年7月で、祭神は天照大神、豊受神、大国主神、貴船神、氏子の区域はソンソン第一農場を対象とし、その数は1,430人である。

こんもりと茂る森、本殿は南向きに位置する。遠方に西日が沈む景色は形容しがたく美しい。鳥居、真っ直ぐに伸びる石段、本殿基壇、玉垣、石燈籠、狛犬はそのまま、境内の基本的な骨格は維持されている。本殿部分は2度の建て直しが行われている。最初の本殿再建は木造で行ったがシロアリにやられたために、現在の本殿は石造で再々建された。本殿は新しくなったが、住吉神社は神社とその境内が今日まで継続してきているのである。ただし、神社の名称は現在テニアン神社と呼称されている。社号標にも「天仁中央神社」の銅版が張り付けられているが、この標識は注意深く調べると凸凹がはげしく、明らかに後からつけたことが分かる。また、新しい一對の狛犬台座には、「奉 昭和五十九年五月吉日建立 天仁安神社奉賛会」「納 昭和五十九年五月吉日建立 清流社」の文字が読み取れる。旧住吉神社跡が現在は天仁中央神社と名づけられて、機能も環境もそのまま存続している貴重な事例である。

【無格社 和泉神社】(調査表 No. 南洋―06, 写真, 図面)

和泉神社はテニアン島マルボ市街、現在聖人の名前をとってサン・イシドロと呼ばれている場所にある。境内の敷地は3,325坪、流れ造りである。創立年は1939年7月、祭神は天照大神、豊受神、大国主神、貴船神、氏子の区域はマルボ市街と第二農場を対象とし、その数は1,952人である。現存しているのは本殿基壇と、その周囲のコンクリート柵(玉垣)のみである。本殿正面は東向きである。その本殿基壇もブロックで外側を囲い、その上に真っ白な切妻の木造平屋建物を建設し、そのなかにキリストと聖人イシドロの立像が安置されている。神社がキリスト教施設に改変しているが、宗教施設であることには変わりがない。台風の被害を受け、切妻の屋根は現在半分崩壊している。周囲には新しく祈りの場、食事の場、水場、調理場、トイレが新設され、電気も引かれている。村の人々は祭りのときに(サン・イシドロ祭)数百人ほど集まる。周囲には僅かに人家が数軒あるのみで、牧場の牛の鳴き声が時折聞こえる閑散とした環境である。

【無格社 橘神社】(調査表 No. 南洋―07, 写真, 図面)

橘神社はテニアン島カーヒの平坦な場所に位置する。境内の敷地は1,818坪、流れ造りである。創立年は1939年8月、祭神は天照大神、豊受神、大国主神、氏子の区域はカーヒ並びに第三農場を対象とする。

現在の境内跡地はジャングル内で、周囲に人家もない。旧農場の一部分に森が残り、その中に廃墟と化した本殿基壇、コンクリート柵（玉垣）、倒れた鳥居、石燈籠、手水鉢が転がっている。この境内跡地の上に大きな火炎樹と南洋松が茂り、在りし日の雰囲気を示す。本殿正面は東向きである。今は完全に放置された場所となっており、現地をよく知る案内人が同行してくれなければ、とても辿り着けない。

【無格社 日之出神社】（調査表 No. 南洋―08-1, No. 南洋―08-2, 写真, 図面）

日の出神社はテニアン島アングアの平坦な場所に位置する。境内の敷地は2,166坪、流れ造りである。創立年は1939年7月で、祭神は天照大神、貴船神、大国主神、氏子の区域は第四農場を対象とし、その数は1,687人である。

現地で位置を確認しようとしたところ、500メートルほど間隔をおいた位置に2つの神社跡地が存在することが判明した。はじめの神社跡地は伝統的な神社形式であり、日欧両文で書かれた案内板が設置されており、NKK（南洋興発株式会社）神社の呼称で紹介され、創立年は不明である。もう一つは中心型の配置平面をもつ独特の形式である。NKK神社は事前の調査においては判明していなかった神社であるが、これが日之出神社の可能性もあり、今の段階で断定をすることは不可能と判断する。そこでここでは前者を（仮）NKK神社（No. 南洋―08-1）、後者を（仮）日之出神社（No. 南洋―08-2）と呼称して、報告を行うこととする。

現在（仮）NKK神社は広い道に面して大きな鳥居があり、その足には「昭和一六年一月十日 第四農場蔗作人一同」の銘がある。そこから更に125メートル中に入ったところに二の鳥居があり、そこから更に60メートルほど奥に行った位置に半分ほどが崩れた本殿基壇が現存する。コンクリート柵（玉垣）もあり、燈籠も3対6つがほぼ完全な姿で残っている。本殿正面は北東を向いている。時々墓参団が訪れるだけで、現地の人々からは忘れ去られた存在である。大きな火炎樹に数本の南洋松が旧境内の雰囲気を残す。現在は放置された状態で、周囲には人家もなく、ジャングル化している。

（仮）日之出神社は見晴らしの良い平坦な場所のロータリーの中心に位置している。4つの四角形の真中にまた同形の矩形が重なり、更にその4角形の中央に9メートル円の基壇がある。その四隅に燈籠が配置されている。木の鳥居の片足（柱）が立っており、もう一方の足（柱）も転がっている。建物の痕跡は見当たらない。四角形は東西南北の軸に完全に合致した配置計画で、アクセスもその四方向から出来るようになっている。完璧な近代の幾何学形態の珍しい事例である。看板には確かにAMERICAN MEMORIAL/HINODE SHRINEと黄色いペンキで書いてある。当時の写真との照合で形態を確認する必要があるが、残念ながら現時点ではできていない。

【無格社 羅宗神社】（調査表 No. 南洋―09, 写真, 図面）

羅宗神社はテニアン島チューロに位置する。境内の敷地は3,624坪、流れ造りである。創立年は1939年7月、祭神は天照大神、大国主神、氏子の区域は直営農場を対象とし、その数は3,400人である。

現在の跡地は周囲に全く人家がなく、ジャングル化している。下からゆっくりとアプローチしていくと入り口の大燈籠に辿り着く。草を掻き分け100メートルほど進むと「羅宗神社」と書かれた社号

標と燈籠が確認でき、また 30 メートルほどいくと階段がある。更に 20 メートルほど行くとコンクリート柵（玉垣）に囲まれた草ぼうぼうの本殿基壇に到達する。本殿正面は西を向く。本殿基壇にのぼり、その先の東方向を望むと展望がすばらしい。遠くに海が見え、朝にはそこから太陽が昇り、この神社本殿の後方から照らしたに違いない。南洋松の大木があり、元神社の境内の雰囲気は十分醸し出されているが、放置されたままである。

4 サイパン島

【無格社 八幡神社】（調査表 No. 南洋―10, 写真, 図面）

八幡神社はサイパン島東村の北斜面の頂近くの大きな二つの岩山の間に位置する。ちょうど昼ごろには真上の 3 m ほどの亀裂から光が落ちてくるドラマチックな場所である。本殿前方には遠く海の風景が展開する。戦前の境内の敷地は 1,500 坪、3 坪の神殿と、16 坪の拝殿があった。創立年は 1924 年 10 月、祭神は大抵比賣神、息長帯姫、氏子の区域は東村一円を対象とし、その数は 700 人である。

現在土地は個人（フランク・ゲレロ氏）の所有であり、本殿跡には 1980 年に 1 坪大の木造の新本殿と鳥居が埼玉県久伊豆神社宮司小林茂氏により再建されている。その顛末は神社本庁の報告書に詳しい（神社本庁 1882: 17-18）。拝殿跡は 4 つの束石が転がり、建物はない。参道は北から登ってくるがすっかり草に埋まっている。取り払ってみると、石段、燈籠 2 基、社号標が出現した。参道の上りきったところには手水鉢とコンクリートの鳥居が倒れたまま放置されている。大きな木と岩が当時の境内の雰囲気を残し、いまでも時折日本からの墓参団が再建された神殿を訪れる。このため平地部分は所有者による手入れが行き届いている。（サイパン）歴史的文物保存館の担当者によると、この敷地の国への移譲計画が現在進行中であり、測量も既に終わって報告書も出されている（Commonwealth of the Northern Mariana Islands, Division of Historic Preservation 2003）。

【無格社 南興神社】（調査表 No. 南洋―11, 写真, 図面）

南興神社はサイパン島チャランカの海に近い、見通しのきく町の中の平地に位置する。境内の敷地は 1,053 坪、春日造りである。創立年は 1937 年 11 月、祭神は天照大神、大国主神、経津主神、罔象女神、氏子の区域は南洋興発会社員とチャランカ町一円を対象とし、その数は 3,735 人にのぼる。

1949 年 12 月に旧境内敷地にカトリック教会（マウントカルメル）が建設された。現在土地は教会の所有で、教会関連施設と学校と墓地がある。墓地の入り口には真っ白に塗られた鳥居が建ち、その柱には「奉進 昭和十二年丁丑長月吉日 松江春次」という文字が書かれている。そこを進むと、途中に燈籠が位置し、奥に真っ白な建物がみえる。その墓地中央の旧本殿基壇上にある白い切妻の建物は当時のものではない。キリストの立像を安置するために新たに建てられた建物である。この基壇の上にも白く塗られた 1 対の燈籠が安置されている。この南興神社跡地は戦後、対象が神社から教会墓地に変わりながらも、同じく宗教関連の施設として利用されてきている。

【無格社 南陽神社】（調査表 No. 南洋―12, 写真, 図面）

南陽神社はサイパン島南村アスリート高台の見通しのきく平地に位置する。境内敷地の広さは

1,860 坪，入母屋造りである。創立年は 1936 年 7 月，祭神は天照大神，豊受大神，貴船神，氏子の区域は南村とアスリート一円を対象とし，その数は 2,288 人である。

現在は飛行場が隣接する。また博物館もここから近い。戦前の派出所建物が道路のすぐ横に廃屋として残っており，その建物の後ろに大木が茂り，いかにも神社境内の雰囲気を感じられる。その先には防空壕も残っている。神社本庁の報告書には（神社本庁 1982: 21）この派出所の後ろに「わずかに石組みが残るのみの神社跡」としてその写真が紹介されているが，今回の調査ではそれも確認出来なかった。近年敷地は政府の所有となり，歴史的保存地域に指定されてきれいに整備が完了し，近い将来公園を作る予定と，同行の博物館員は話していた。整備事業で神社の痕跡は完全に消失したのである。

【無格社 彩帆神社】（調査表 No. 南洋―13，写真，図面）

彩帆神社はサイパン島ガラバン町香取山に位置する。創立の経緯については，先に見たが，今日では香取神社連合会によって 1985 年に彩帆香取神社として「再建」されている。境内の敷地は 6,427 坪，社殿は神明造りで建坪は 134.5 坪である。創立年は 1914 年 11 月，祭神は天照大神，大国主命，香取大神，氏子の区域はガラバン町一円を対象とし，その数は 25,000 人にのぼる。

現況は山の中段に位置する石の本殿と立派なコンクリートの拝殿，鳥居，燈籠，コンクリート橋等が新しく創られ，さらに拝殿横にも，「彩帆鎮霊社」が清流社青年神職と南洋群島慰霊巡拝団によって 1985 年に建てられている。本殿正面は西を向いている。現存するものとしては，本殿基壇とそれに至る階段部分，それに一部が壊れて横たわっている「彩帆香取神社」のコンクリートの社号標と燈籠 1 基（火袋と笠の部分なし。但しこの燈籠の笠の部分と思われるものが境内の端に転がっている）だけである。この他広い敷地内にはサイパン平和記念碑，松江春次像，USN ポール，さとうきび運搬用機関車，ベンチがあり，旧神社機能を継続維持すると共に，平和公園の機能も新しく加わっていて，今日，日本からの墓参団や観光客の立ち寄り所になっている（現砂糖王公園）。境内の両側は一段掘り下げられて，道路が新設されている。敷地全体手入れが行き届いていて美しい。敷地続きの道路を越えた西側には旧病院を改造した博物館が隣接し，その側には燈籠 1 対が立っている。

【無格社 カラベラ神社】（調査表 No. 南洋―14，写真，図面）

カラベラ神社はサイパン島北村カラベラ，山の麓に位置する。境内の敷地は 6,000 坪，神明造りである。創立年は 1919 年 10 月で，祭神は天照大神，豊受大神，氏子の区域は北村一円を対象とし，その数は 2,887 人である。

現在は現地博物館員の案内でも神社跡地に到達するのは何度も迷ったほど，完全にジャングルの中に埋没している。途中から舗装道が砂利道に変わり，左右に牧場が続く。そのなかの 1 つの個人敷地の柵を開けて，西の岩山の麓に向けて 200 m ほど進むと小川があり，そこに太鼓橋が架かる。左右に鳥居の後が残り，横に手水鉢が放置されている。そこより真っ直ぐに木立の中を進むと階段があり，その両サイドにいくつもの燈籠基壇が残っている。登りきると階段がありその上に本殿のための広い平らな基壇部分が残る。注意を引くのは更にその左後方 8 メートルほど登った岩の元に半壊した摂社の小さな基壇が設けられているのが認められる。本殿と摂社の 2 つの基壇跡が確認できた珍しい事例

である。方向は山を背にして東を向く。周囲の鬱蒼とした樹木を取り除けば素晴らしい展望が開ける小高い場所に位置しているが、今は全く放置され、廃墟となっている。

【無格社（仮称）南洋コーヒー神社】（調査表 No. 南洋―15, 写真, 図面）

（仮称）南洋コーヒー神社はサイパン島 SABANAN に位置する。佐藤論文には無い神社跡地である。倒れている鳥居の柱に、「納・南洋コーヒー株式会社」の銘があることと、この付近はかつてはコーヒーが栽培され、現地の人がコーヒー神社と呼んでいることより、（仮称）南洋コーヒー神社と名付ける。アメリカ人用会社社宅のなかを車を通して、山の突き当たりの麓に到着し、そこから約 50 メートルほど参道らしき真っ直ぐの急勾配を登ろうとするが、台風の倒木が放置されたままになっているので、大きく迂回して斜面を登ると洞窟の前に立つ。3 段の階段を上がると、13 平方メートルほどの洞穴がある。穴の半分からは更に 5 段の階段でのぼり、その奥の部分はコンクリートの床に仕上げられている。最深部は更に 4 段の階段があって高くなっており、昔はここに本殿が設けられていた可能性がある。もし、そうであるならば本殿は南向きである。洞穴の中に本殿が設置された珍しい事例となる。よくみると数本の線香の残りがあふ。博物館員の話によれば一時期野戦病院として利用していた時期があったとのことであるが、その資料は確認されていない。洞窟とその前の旧参道部分は樹木で覆われて放置されたままである。現存するのは倒壊した 3 分の 1 ほどの鳥居と、燈籠 1 基、それに燈籠の基壇 1 つのみである。参道の階段はわずかに上部のものが一部確認できるだけである。

【無格社 泉神社】（調査表 No. 南洋―16, 写真, 図面）

泉神社はサイパン島の Egigi の地、山の中腹の台地に位置する。佐藤論文には報告の無い神社である。砂利道から木柵を越えて大きな岩の間を抜け、20 m ほど登るとコンクリート製の何かの台石のみ転がっている。更に急坂をよじ登ると平地にでる。鬱蒼と茂る樹木の間から鳥居と両脇に燈籠の残骸が認められる。鳥居には「泉神社」「昭和十八年三月建之」と彫られているのが判読できる。また燈籠にも「泉神社」の漢字が刻まれている。鳥居から更に 50 m ほど奥に行くと 7 段の階段があって、本殿跡がある。本殿正面は東を向いているが、ジャングルのために見通しが利かない。完全にジャングルに埋没し、放置されたままである。

【無格社 金山神社】（調査表 No. 南洋―17, 写真, 図面）

金山神社はサイパン島旧第一司令部跡横にコンクリート製社号標のみある。ここに戦前神社があったかどうか、佐藤の一覧表にも載ってなく、それは不明である。神社本庁の報告書にも社号標の事は出てくるが（神社本庁 1882:6）、その存在については確認されていない。しかし社号標にははっきりと「奉納金山神社」「昭和拾四年五月吉日」「藤田常務取締役菊田燐鋳課長建之」の陰刻が認められる。

5 パラオ諸島

【ガラスマオ神社】（調査表 No. 南洋―18, 写真, 図面）

ガラスマオ神社はバベルダオブ島ガラスマオ村にある。コロール町から悪路 2 時間半、村の入り口を

左に折れ、100メートルほど行った道端に鳥居のあとが認められる。そこから更に旧参道とおぼしき上り坂を15分ほど歩くと、山の頂上に近い台地にでる。見晴らしは良好、東面して拝殿と本殿の基壇跡が残る。その他には手水鉢の断片と、鳥居の跡がある。これもまた佐藤論文では報告の無い神社である。今は全く放置されて、廃墟になっている。この村は近くにボーキサイトの山があり、村人達はそこで働いていたとのことである。

【官幣大社 南洋神社】(調査表 No. 南洋-19, 写真, 図面)

官幣大社南洋神社はパラオ島コロル町アルミス高地に位置する。境内の敷地は96,248坪、総建坪は不明、神明造り、大鳥造を基調とする。創立年・列格年共に同じ1940年11月で、祭神は天照大神、氏子の区域は広く南洋群島一円を対象とし、その数は131,037人にのぼる。造営中の鳥瞰図をみると、境内は階段の直線道と、緩やかな道の2つの参道からアクセスできるようになっている。境内は社務所部分と拝殿部分、それに本殿部分の大きく3つの区域がそれぞれ異なるレベル差をもって構成されている。建物は本殿、拝殿、摂社、社務所、門、手水舎、他3棟が描かれている。

市内からは遠く北に離れた半島部分に位置する。車で向かう途中に燈籠が1対そっくり残っている。また更に進むと燈籠の基壇のみが1つ残っている。さらに前進すると、旧境内入り口に至り、木の社号標と1対の燈籠、それにコンクリートの石橋が認められる。現在旧参道の大階段はあるが、入り口がふさがっていて入れない。横の幅員5メートルほどの道を100メートルほど登ると、途中で自動車修理工場1棟と住宅1軒がある。その先に旧日航ホテルへのゲートと、今は個人住宅の敷地になっている門が並列して設けられている。その個人住宅の門からなかに入っていくと旧境内には個人の2階建家屋1棟と、その付属屋、及びテントが目にはいる。かつての拝殿・本殿の基壇、それを繋ぐ階段の形態はそのまま残っており、石積みのどっしりとした存在感が、旧境内の雰囲気伝える。植木用苗木と植物が基壇上を埋め尽くす。本殿は真西を向いている。旧本殿跡地には石造の小さな新しい社殿が設置され、その右横には「再建」の趣旨を述べた新しい石碑が立つ。「(前略)日本人がその地に定住するには、先ず土地の国魂を祀り開拓の先輩を敬重し、敬神崇祖のまごころを尽くすことから始まった。その精神の集中するところが神社であった。しかしながら今次大東亜戦争の挫折によって南洋神社も一旦撤収のやむなきに至った。ここに、新たな時代を迎えて日パ両国の有志により神社の歴史的由縁に基づきこれを再建し祖先と英霊の御加護を祈り南洋の発展と平和の基点とし以って世界文明の進運に寄与せんと願うものである。平成9年10月吉日」。さらに、社殿左横には別の石碑(戦死者顕彰碑)が設置され、そこには「この南洋神社には日本とパラオの祖先神と大東亜戦争の戦死者が刻まれている。ここに、パラオの戦死者の名を刻み、その勇気を讃える。名越二荒之助」とある。

裏に上ると正面左手、住宅の屋根越しに海が見える。摂社跡地は駐車場になっている。いまだ手水舎が現存する元の社務所レベルに階段を降りると、燈籠が1対現存、ここも苗木を育てており、付属屋が3棟ある。よく見ると以前テニスコートとして使用されていたことがわかる。

参道に下る入り口に立つと、両側に今も燈籠の基壇がある。広い参道には両脇に大きな木が並び、石段と燈籠基壇が残るが、参道の面影は薄い。

南洋を代表する官幣大社南洋神社跡地は現在個人の敷地となり、住宅が建てられているが、旧本殿・

拝殿の基壇部分はそのまま残り、日本からの参拝者用に鳥居と小さな社殿それに燈籠、狛犬が再設置され、休憩所も設けられている。

【無格社 ペリリュウ神社（跡）】（調査表 No. 南洋―20-1, 写真, 図面）

ペリリュウ神社はパラオ諸島ペリリュウ島、現通称ニキッター・ニケッターの地にあり、かつての公学校の北隣に位置する。境内の敷地は518坪、神明造りである。創立年は不明、祭神は天照大神、明治天皇、氏子の区域はペリリュウ島一円を対象とし、その数は800人である。

現在は旧社殿の背後にあったライムストーン（舗装材）の小山の採取場の前庭になっており、戦後米軍が道路工事に使用したブルドーザが放置されている。ヒヤリングによれば社殿、鳥居が最近までここにあったが、今は新社殿位置に移されて何も無い。その他にも、鳥居と1対の狛犬があったことを記憶しているとのことであったが、わずかに鳥居の建っていた位置が土の表面に残るのみである。

【（新設）ペリリュウ神社】（調査表 No. 南洋―20-2, 写真, 図面）

（新設）ペリリュウ神社はパラオ諸島ペリリュウ島、旧神社跡地の北西方向、丘にのぼりジャングルが見渡せる高台に位置する。新しく鳥居、燈籠、社殿が新設され、その本殿に向かって左側に、旧神社跡地に建てられていた社殿と鳥居がある。本殿の左下の石碑には神社の由緒が次のように刻まれている。「この神社は青年神職等の組織する清流社が昭和五十七年（1982年）五月に建立したもので、先到大戦において祖国日本を護るために此の地で散華された、多くの陸海将兵と民間人すべての御霊を祀る鎮魂のところです。祭典は毎年行われ祖国の安泰と世界の平和を祈念いたします。平成十三年七月吉日 清流社」

また、このペリリュウ島は南洋群島の中でも、日米の激戦が最も激しく、最も長期間にわたって展開されたところであった。そういう事もあって、この社地には米太平洋艦隊の指揮官ミニッツの次の言葉を刻んだ石碑も建てられている（この石碑も旧神社跡地に建てられていたという事である）。「諸国から訪れる旅人たちよ、この島を守るために日本軍人がいかに勇敢な愛国心をもって戦いそして玉砕したかを伝えられよ」。

おわりに

2005年度は旧南洋群島の神社跡地調査を中心にして、戦前戦後の資料を収集整理し、併せて写真撮影を行い、22枚の調査シート（対象神社は21社、ペリリュウ神社は新旧2枚のシート）にまとめてデータベースを作成した。

神社の様式が判明しているのが15例である。その内訳は多い方で見えていくと流れ造が6件、南洋神社を代表とする神明造が4件、木造平家建というのが4件である。判明した20事例の境内位置は平地が6件、山麓が3件、山の中腹が4件、山頂及び高台が7件である。特徴的なのは大きな岩に挟まれた場所や洞窟内に本殿が設置されている事例が見られたことである。これは、あるいは移住者の多くを含めた沖縄県民の御嶽信仰とかかわるのかも知れない。本殿正面の方向は判明した16事例のうち真南、真東がそれぞれ1件、真西が3件、南東が4件、南西が5件とほとんど南側半分に偏って

いる。北側半分は真北が1件、北東が1件、北西は0件である。これは南洋群島から見ると北に日本が位置することが1つの理由になっているとも考えられる。島ごとの特徴を見るとテニアン島の神社が様式が全て流れ造であり、かつ現存調査から本殿基壇部分をコンクリート柵（玉垣）で囲い込んでおり、島内に一定の形式があったことが判明した。

現存・現況結果をまとめると調査対象21事例の内、本殿位置が確定できたのが15例、地図やヒアリングで位置は判明したが本殿の位置を確定できなかったのが5事例、残りの1つは最近新設された1事例である。

現況を調べると放置されたままジャングルの中にあるのが7件、神社機能を果たしているのが5件、キリスト施設の一部に変わりながら利用存続しているのが3件、記念公園になっているのが3件、学校敷地になっているのが1件、採掘場の前庭になっているのが1件である。

現存割合は7割とかなり高い。現況調査と併せてみると、前年秋の樺太の調査では神社としての機能を持つ事例が見られなかったのに、本調査では21社の内5社も「再建」され、神社機能や境内の環境を保持し続けていることが大きな特徴である。

また、戦後キリスト施設に変更された旧神社跡地も、その基本的な空間構造を維持している。さらに岩や洞窟といった自然条件を利用した旧神社跡は今日も神社を「再建」したり、公園を造ったりして、その特色ある景観を生かし続けている。

しかしながら、3割強の神社跡地は自然の中に埋没し、その空間構造は完全に消滅してしまっている。

謝 辞

今回の調査にあたり、東京外国語大学の内海孝氏、神社本庁の前田孝和氏、元南洋群島協会理事小菅輝雄氏のご令嬢太田敏江氏、北マリアナ諸島連邦日本人会ロタ支部長古川明於氏、北マリアナ諸島連邦歴史的文物保存館（ロタ島）、テニアン在住の萩島武司氏、名鉄フレミングホテルの杉本氏、北マリアナ諸島連邦歴史的文物保存館（テニアン島）、北マリアナ諸島連邦歴史的文物保存館（サイパン島）のGeneviev S. Cabrera氏をはじめとする諸氏、北マリアナ諸島連邦博物館のNoel. B. Quitugua氏、パラオ国立歴史的文物保存館のWalter R. Metes氏、同Lynda Dee Tellames氏の諸氏には大変お世話になった。

ここに記して深甚の謝意を表する次第である。

執筆分担

本文のI・IIは中島（図2～5は富井）、IIIと「おわりに」は富井、添付資料の①調査表は大坪、②実測図面及び③写真は富井の執筆。今回の調査の通訳及び欧文文献の翻訳はサイモンが行った。

注

- (1) 人口がピークに達した1943年段階の在住人口は総数148,972人、日本人（朝鮮人・台湾人を含む）96,670人、現地住民52,197人、外国人105人である（今泉1992:47）。
- (2) （仮称）南洋コーヒー神社とは、サイパン島で新たに発見した神社である。倒壊した鳥居に「納 南洋コー

- ヒー株式会社」と刻まれていたので、このように表記した。尚、南洋コーヒー株式会社はハワイで事業に成功しつつあった住田次郎が1926年に設立したもの。同社がコーヒー栽培を始めてから、コーヒーがサイパン島の特産品として知られるようになった（今泉2002:619）。
- (3) 1935年に建てられた製糖工場は、土質が甘蔗に適せず成績不良のため、1939年には操業を停止し、合成酒『南の誉・南興』醸造工場に転換した（沖縄ロタ会1990:28-29）。
- (4) 滑川によれば、1934年12月に同島に鎮座した南興神社がその始まりとされている（滑川1982:1）。
- (5) 今泉（2002:672-678）は、宗教として1キリスト教、2仏教、3神道をあげ、神道のところで、神社の事を叙述しているが、宗教としての神道は教派神道（天理教や金光教等）等を指すものであり、戦前においては、神社（神道）は国家神道として、宗教とは区別されていた。
- (6) この教育を通じた同化・皇民化政策は（石上1983）に詳しい。
- (7) 清流社は、国学院大学文学部神道科卒で東金砂神社権禰宜、ペリリュウ神社宮司（1982年現在）の滑川裕二が1976年に結成したものである（滑川1982:奥附）。尚、『朝日新開』（2004年10月23日付）は、「右翼団体副会長／恐喝未遂罪で起訴」の小見出しのもと、「東京地検は22日、NPO法人〈メディアオンブズマン〉の理事で、右翼団体・日本青年社副会長の滑川祐二容疑者〈53〉、同法人調査役の浅水聡容疑者〈60〉を恐喝未遂罪で起訴した」という記事を載せている。
- (8) 清流社を主宰する滑川は神社「再建」の目的は「英霊の名誉回復を計る」という悲願にあるとしている（滑川1982:1）。
- (9) 日本人の旧南洋群島地域の観光客は1970年代ごろから急増。97年以降減少に転じたが、2000年から回復に向かっている。例えば、サイパンでは年間約50万人、その内の約75%を日本人が占める（大野俊2001:137-138）。また、1981年12月に来日したパラオ共和国観光局長K・イナボは、神社の「再建」を含む「旧日本時代の名所古跡の復元は必要であるが、あく迄もその目的は観光資源に他ならない」と主張した（滑川1982:16）。
- (10) 滑川の本（滑川:1982）を手に入れたのが、脱校後であったため本文で「ペリリュウ神社（跡）」・「旧神社跡地」としたのは、戦前にあったペリリュウ神社跡でなく、1982年に清流社によって再建されたペリリュウ神社跡であるようである。現在ある「（新設）ペリリュウ神社」は、その後さらに新しく場所を移して建てられた（「再々建」）もののようである。「（新設）ペリリュウ神社」にあった神社の由緒を述べた石碑の日付は「平成13年7月」となっているので、あるいはこの頃に「再々建」されたのかもしれない。

引用文献

Commonwealth of the Northern Mariana Islands ; Division of Historic Preservation

2003 *An Archaeological Survey of the Hachiman Jinja Site*: Kannat Taddong Papago, Saipan.

外務省条約局

1990『外地法制誌』11「委任統治領南洋群島」後編、東京：文生書院。

石上正夫

1983『日本人よ忘るなかれ——南洋の民と皇国教育——』東京：大月書店。

今泉祐美子

1992「日本軍による支配の実態と民衆の抵抗——ミクロネシア——」『歴史評論』508:43-51。

2002「南洋群島」具志川市史編さん委員会『具志川市史 第4巻 移民・出稼ぎ 論考編』pp.547-750, 沖縄。神社本庁

1982『第4回海外神社視察研修団 サイパン・パラオ戦没者慰霊の旅（報告書）』東京：神社本庁。

官幣大社南洋神社奉賛会

1941『官幣大社南洋神社御鎮座祭記念写真帖』。

小菅輝雄

1978『昔の南洋群島写真帖』東京：グアム新報社.

1985『昔 南洋群島 今』東京：南洋群島協会.

丸山義二

2002『南洋群島』（初出は1942年），復刻版『文化人の見た近代アジア 14』東京：ゆまに書房.

松江春次

1932『南洋開拓拾年史』東京：南洋興発株式会社.

中島三千男

2000「〈海外神社〉研究序説」『歴史評論』602:45-63.

2004「海外神社跡地に見る景観の変容」神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議『神奈川大学21世紀COEプログラム調査研究資料1 環境と景観の資料化と体系化にむけて』（仮題）.

滑川裕二

1982『ペリリュー神社奉賛会設立趣意書——現地人の要望による＝ペリリュー神社再建由来記——』東京：同神社奉賛会事務局.

南洋庁

1993a『第1回南洋庁統計年鑑』（初出は1933年），復刻版南方資料叢書11-1『南洋庁統計年鑑』第1巻，東京：青史社.

1993b『第2回南洋庁統計年鑑』（初出は1934年），復刻版南方資料叢書11-2『南洋庁統計年鑑』第2巻，東京：青史社.

1993c『第3回南洋庁統計年鑑』（初出は1935年）『第4回南洋庁統計年鑑』（初出は1936年）『第5回南洋庁統計年鑑』（初出は1937年），復刻版南方資料叢書11-3『南洋庁統計年鑑』第3巻，東京：青史社.

1993d『第6回南洋庁統計年鑑』（初出は1938年）『第7回南洋庁統計年鑑』（初出は1939年）『第8回南洋庁統計年鑑』（初出は1940年）『第9回南洋庁統計年鑑』（初出は1941年），復刻版南方資料叢書11-4『南洋庁統計年鑑』第4巻，東京：青史社.

1934『昭和九年版 南洋群島要覧』.

小笠原省三

1953『海外神社史 上巻』東京：海外神社史編纂会.

沖縄県教育委員会

2002『沖縄県史ビジュアル版9 近代② 旧南洋群島と沖縄県人——テニアン——』沖縄.

沖縄ロタ会

1990『ロタ会会誌——創立10周年記念——』沖縄.

1998『ロタ島住宅地図②』沖縄.

大野俊

2001『観光コースでないグアム・サイパン』東京：高文研.

佐藤弘毅

1997「戦前の海外神社一覧——樺太・千島・台湾・南洋——」『神社本庁教学研究所紀要』2:211-213.

2004「終戦前の海外神社一覧」藺田稔・橋本政宣編『神道史大辞典』付編 pp.1133-1192，東京：吉川弘文館.

富井正憲・藤田庄市・中島三千男

2004「旧樺太（南サハリン）神社跡地調査」神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』1:126-157.

上原轍三郎

2004『植民地として観たる南洋群島の研究』（初出は1940年），復刻版『アジア学叢書106』大空社.

矢内原忠雄

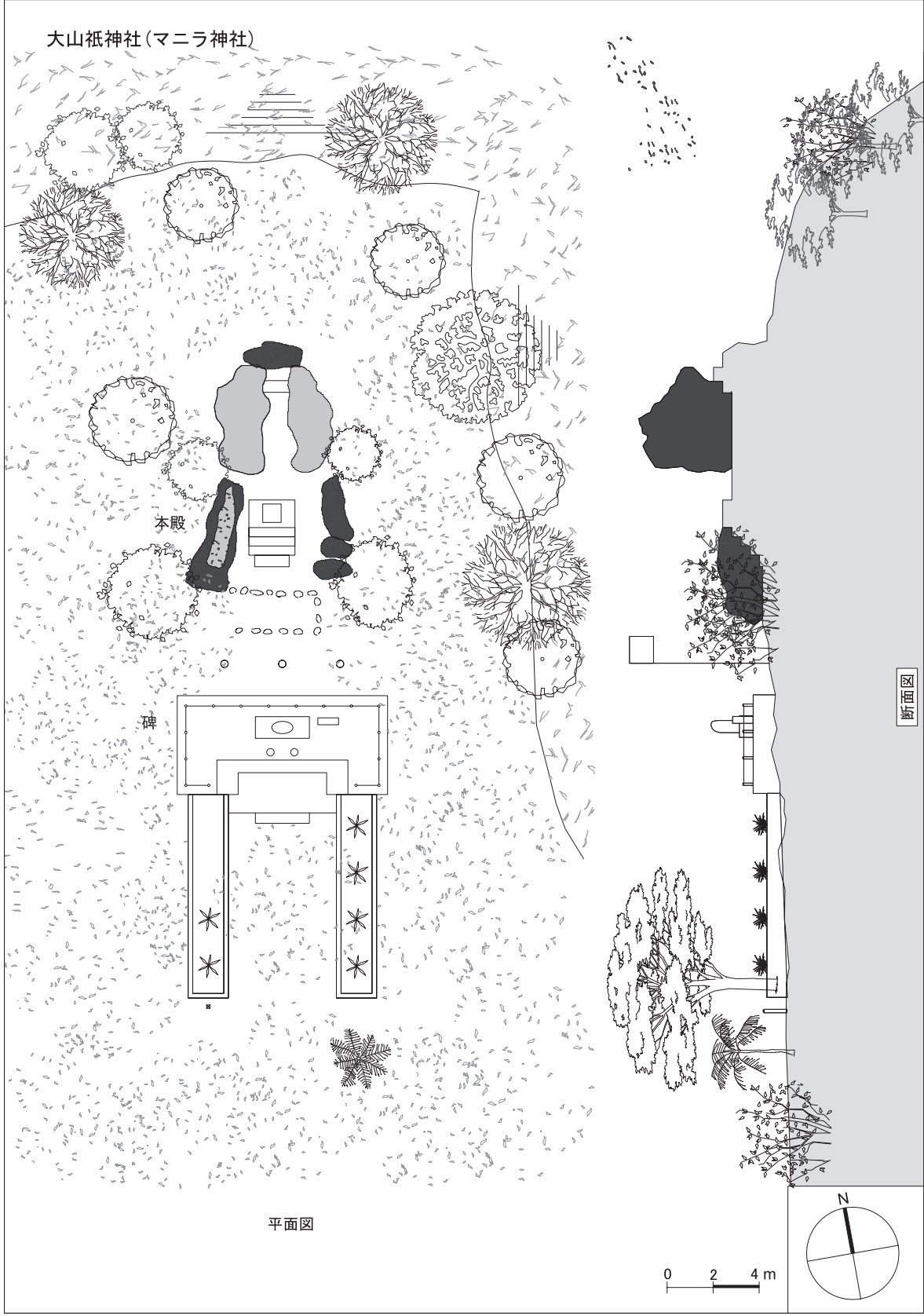
1935『南洋群島の研究』東京：岩波書店.

海外神社調査表		No. 南洋—01	
1. 旧名称	ロタ神社	a. 現名称	トンガケーブ
2. 旧所在地	ロタ島ソンソン サイパン支庁ロタ出張所	b. 現所在地	ロタ島ソンソン村 トンガケーブ
3. 創立年沿革	1939（昭和 14）年 10 月 2 日 （1939 年 4 月本殿鎮座祭，拝殿は 1940 年に建立） 無格社 祭神 天照大神，大国主神，高麗神 氏子数 3,594 人 氏子区域 ロタ島一円	c. 戦後の沿革	1946 年にはまだ建物，鳥居があった （70 歳古老の話） 現在，政府の所有
4. 建築内容	本殿 木造平屋建 付属舎 鳥居，塔 境内地 4,500 坪	d. 旧建築 無 （状況・種類） 有 新築 （用途，階層，構造）	本殿基壇，拝殿基壇 キリスト像安置建物 1 棟＋祈りの場 1 棟 （2003 年拝殿・キリスト両屋根再建）
5. ヒアリング	観光地である。現在は日本関係の遺跡の一つとしての位置付け。洞窟が観光のメイン。 トンガ船の難破，避難場所。 自然の洞窟を守備隊がより深く掘ったという。1600 年代，キリスト教宣教師が住んでいたと伝えられる。 広い境内跡の 2 つのステージは年 1 度のキリスト教のフェスタ用の施設。 5 分程近くに寺も 2 ヶ寺あった。現在は給水塔が一つ残っているのみ。（以上日本人会ロタ支部古川明於氏より）		
6. 所見	大きな断崖の下，村に開いた場所に位置する。その断崖の上にキリスト十字架，その約 30 m 下にトンガ洞窟がある。 洞窟の入口右石板に海軍大将末次信正の書による陰刻「神威洞」あり。中に入るとコンクリートのステージ 3 ヶ所あり。 一番奥の高い場所に祭壇あり。この洞窟は宗教的匂いがする。 洞窟前の旧本殿跡に現在キリスト像安置。その前に拝殿跡あり。 とにかく暑い，花が綺麗。火炎樹（南洋桜）の花ともう一種，赤系の色が，バックの緑と岩肌をうけて美しい。 拝殿と道路の間（旧参道両脇？）に鉄木（イフィック）がある。		
7. 資料内容			
・写真	ROTA（ロタ）表紙		
・絵はがき			
・図面	1943（昭和 18）年 ROTA. sonsong 見取 ロタ島ソンソン街のバードアイ・スケッチ（俯瞰図）		
・地図	ロタ島兵要地誌資料図（昭和 19 年 2 月調製），ロタ島住宅地図①（1998. 1. 8 版），SONGSONG ROTA ISLAND [ABOUT 1913, 1943 各 1 copy]，Island of Rota Songsong Village Map of 1948		
・その他（本）	戦前の海外神社一覧（佐藤論文）p 212，昔の南洋群島 昔のロタ島 ジェイ・エンタープライズ 03-543-2944		
調査年月	2004 年 8 月 8 日		
	調査者氏名 中島三千男，冨井正憲，大坪潤子， Simon John，古川明於		





海外神社調査表		No. 南洋—02	
1. 旧名称	大山祇神社（マニラ神社）	a. 現名称	Peace Memorial Mt. Sabana
2. 旧所在地	ロタ島サバナ マニラ高地	b. 現所在地	ロタ島サバナ マニラ高地
3. 創立年沿革	（不明） 無格社	c. 戦後の沿革	1973 年 9 月 記念碑「平和の礎」設置 細見卓・書，平和記念碑建立委員会 1997 年 2 月 岐阜県可児市とフレンドシップ提 携，可児造園組合が梅の木寄贈，施 設作る。
祭神	大山祇命		
氏子数	400 人		
氏子区域	サバナー円		
4. 建築内容	木造平屋建	d. 旧建築	無
本殿		（状況・種類）	有
付属舎		新築	
鳥居，塔		（用途，階層，構造）	
境内地	700 坪		本殿基壇 コンクリート東屋・1 層，コンクリートブロック， 男女トイレ・1 層，祭壇
5. ヒアリング 鉄木（イフィック）の鳥居 今日（調査日）は日曜日で，フィリピン人家族がバーベキューパーティーに来ていた。 バーベキュー施設は慰問団のセレモニー施設として利用される。			
6. 所見 （サバナ：水田付近並南海岸，通視良好） 標高 496.4 m 「島中最高ニシテ土質粘土ニシテ陣地構築ニ便ナルモ展望不十分ナリ。台地ハ人工林密生シアリ」（資料より） 燐山の神，大山祇，（山の神様）⇒鋤山 or 金の神様 一番高いマニラ山に位置する。頂上は平，周りを見渡してもどこにも人家なし，なぜこんな場所に，との疑問→燐の産出場所との関係で生まれた神社と推定。 かまどの耐火煉瓦には SHINAGAWA の刻印があるものが含まれている。ガイドの古川氏によれば製糖工場跡から持ってきたもの。			
7. 資料内容			
・写真			
・絵はがき			
・図面			
・地図 ロタ島一覧図 1/24000 (S 14. 10. 4)			
・その他（本） 戦前の海外神社一覧（佐藤論文）p. 212, ロタ島最高峰マニラ山マニラ神社 p. 182, ロタ会誌・創立十周年記念・沖縄ロタ会/1990 年, tel 098-861-8761			
調査年月 2004 年 8 月 8 日		調査者氏名 中島三千男，冨井正憲，大坪潤子， Simon John，古川明於	



No.南洋-02写真1



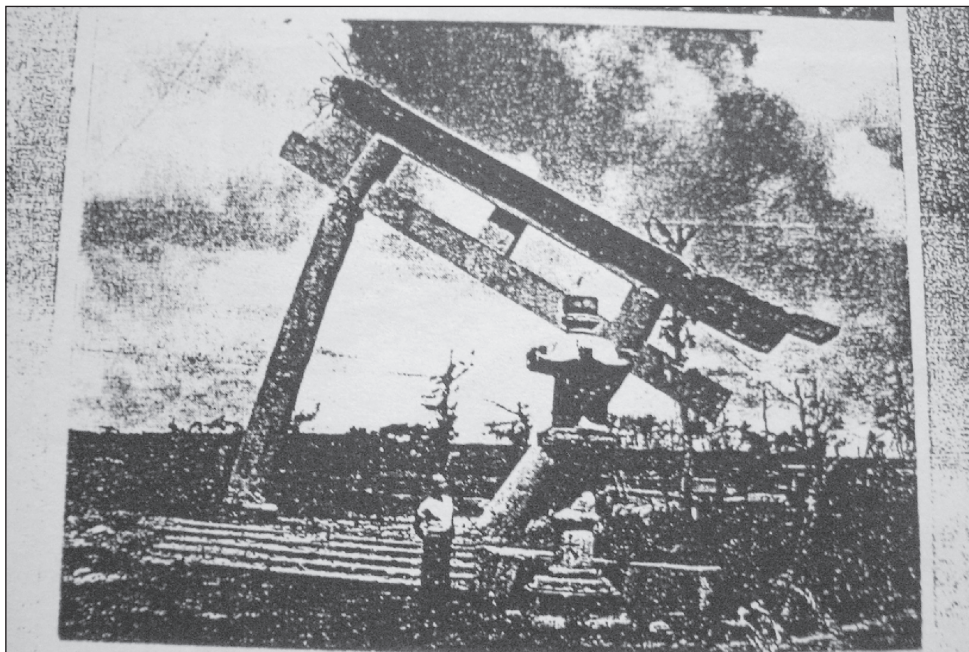
大山祇神社（マニラ神社）

海外神社調査表		No. 南洋―04	
1. 旧名称	天仁安神社	a. 現名称	
2. 旧所在地	テニアン島ソンソン市街	b. 現所在地	テニアン島ソンソン市街
3. 創立沿革	1934（昭和9）年11月23日 無格社	c. 戦後の沿革	現在学校及び教会の敷地になっている。
祭神	天照大神，明治天皇，貴船神		
氏子数	15,488 人		
氏子区域	テニアン島一円		
4. 建築内容	流れ造	d. 旧建築	無
本殿	本殿 9 坪，拝殿 14 坪	（状況・種類）	有
付属舎	社務所 24 坪		
鳥居，塔		新築	
境内地	6,219 坪	（用途，階層，構造）	
5. ヒアリング	<p>教会にいた信者（女性 20 代か）の話では，テニアンで生まれ育ったがここに神社があったことは知っているものの，見た覚えはないとのこと。</p> <p>HPO では，上司の話として現在図書館建設中の位置に，かなり大きな鳥居がかつてあったとのこと，戦車に壊されて今は跡もない。</p> <p>小学校教員の夫君（アメリカ人）の話では，戦後神社跡はブルドーザーで整地，そこで出たものはゴミ捨場へ持って行かれたとのこと。</p>		
6. 所見	<p>燈籠状のもの 2 基や鳥居の柱一部は確認したが，神社の位置は特定できず。</p> <p>全体に平に整地されている。</p>		
7. 資料内容			
・写真			
・絵はがき			
・図面			
・地図 南洋群島（今泉裕美子）p. 589，図 3・テニアン島			
・その他（本）戦前の海外神社一覧（佐藤論文）p. 211			
調査年月	2004 年 8 月 11 日		
調査者氏名	中島三千男，富井正憲，大坪潤子，Simon John，萩島武司		

No.南洋-04写真1

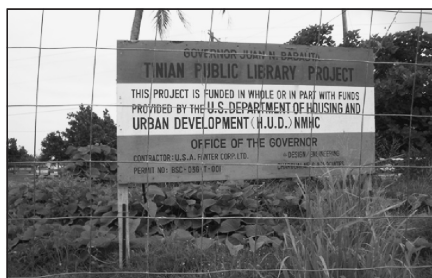


『我等が海の生命線・南洋写真帳・サイパン島テニアン島ロタ島之巻』（南洋舎）



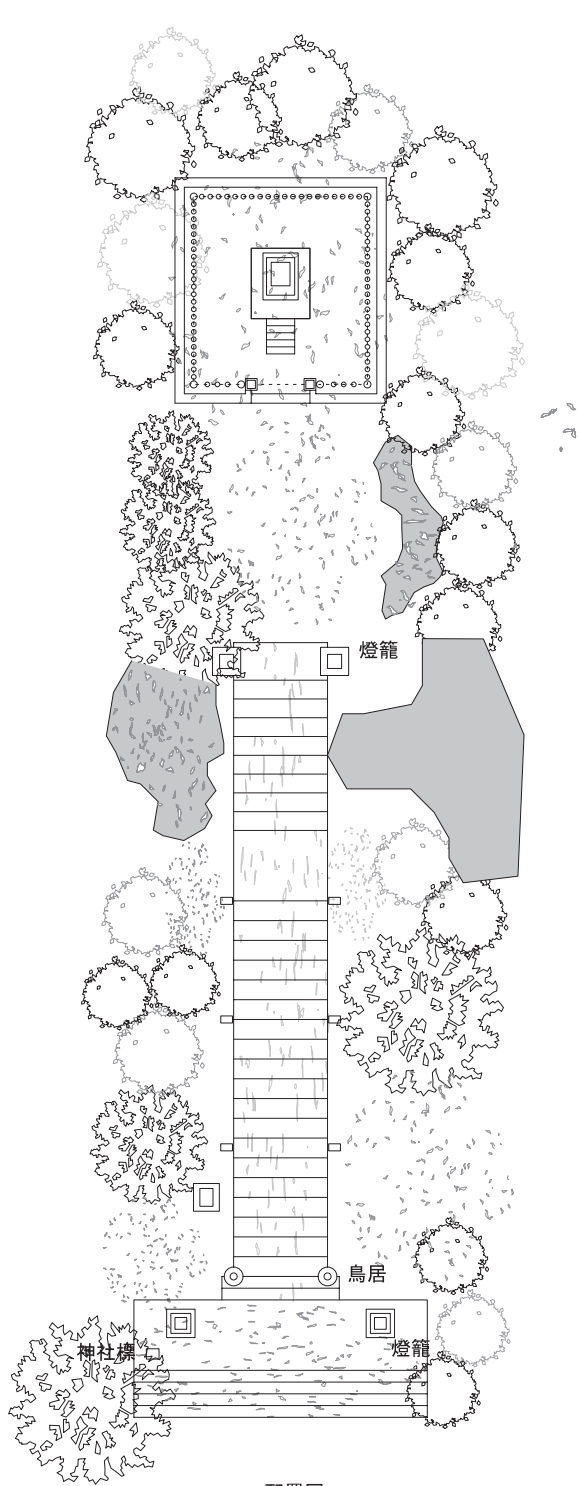
北マリアナ諸島連邦歴史的文物保存館（テニアン島）所蔵
（但し鳥居の様式や階段の有無が異なっており、天仁安神社のものであるか不明である。本文参照）

天仁安神社

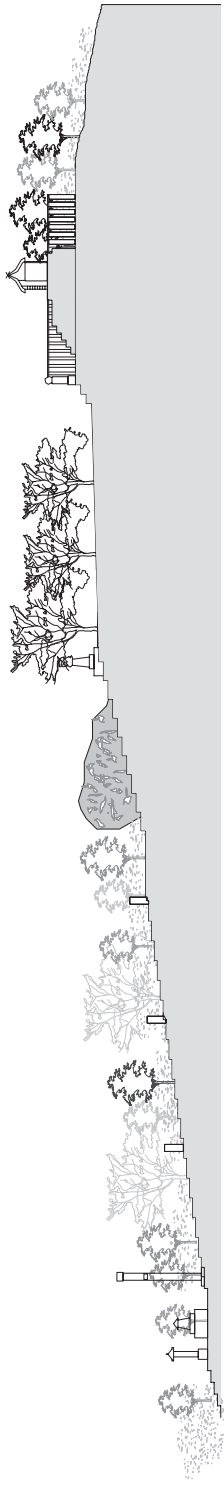


海外神社調査表		No. 南洋—05	
1. 旧名称	住吉神社	a. 現名称	テニアン神社（天仁央）と呼ばれる
2. 旧所在地	テニアン島ソソソソ	b. 現所在地	テニアン島カドリナス
3. 創立年沿革	1939（昭和 14）年 7 月 28 日 無格社 祭神 天照大神，豊受神，大国主神，貴船神 氏子数 1,430 人 氏子区域 ソソソソ第一農場	c. 戦後の沿革	木造本殿設置→石造本殿設置 1984 年，清流社，天仁央神社奉賛会が 新しい狛犬一対設置
4. 建築内容	流れ造 本殿 付属舎 鳥居，塔 境内地 1,500 坪	d. 旧建築 無 （状況・種類） 有 新築 （用途，階層，構造）	本殿基壇，玉垣，階段，狛犬，燈籠，鳥居現存 本殿は 2 度建築。1 度目は白蟻被害のため 2 度目は石造。他に狛犬 1 対。
5. ヒアリング 20 年程前に木造の本殿が再建されたが白蟻にやられ，更に新しく石造の本殿が再建された。			
6. 所見 ライオンロックの山の中腹にこんもりと繁る森，中腹南向きに本殿は位置する。海は西側に開ける。階段を下って西に曲がると遠方に西日が沈む景色は美しい。境内の環境は変わっていないが本殿が石造で新しくなっている。1 度目は木造，2 度目の再々設置で白蟻のため石造にしたとのこと。住吉神社と考えるが現在の神社標は「天仁央神社」。標の文字面をコツコツとはたくと金属板であり，明らかに後から付けた感あり。狛犬も新しく，住吉とテニアン神社両社のものがごちゃまぜに置いてある。注意。 狛犬一対台座側面印刻「奉 昭和五十九年五月吉日建立 天仁安神社奉賛会」，「納 昭和五十九年五月吉日建立 清流社」			
7. 資料内容			
・写真		南洋写真帖，内海孝氏撮影分	
・絵はがき			
・図面			
・地図		南洋群島（今泉）p. 589・図 3，テニアン島	
・その他（本）		戦前の海外神社一覧（佐藤論文）p. 211	
調査年月 2004 年 8 月 10 日		調査者氏名 中島三千男，富井正憲，大坪潤子，Simon John，萩島武司	

住吉神社

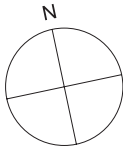


配置図



断面図

0 2 4 m



No.南洋-05写真1



北マリアナ諸島連邦歴史的文物保存館（テニアン島）所蔵

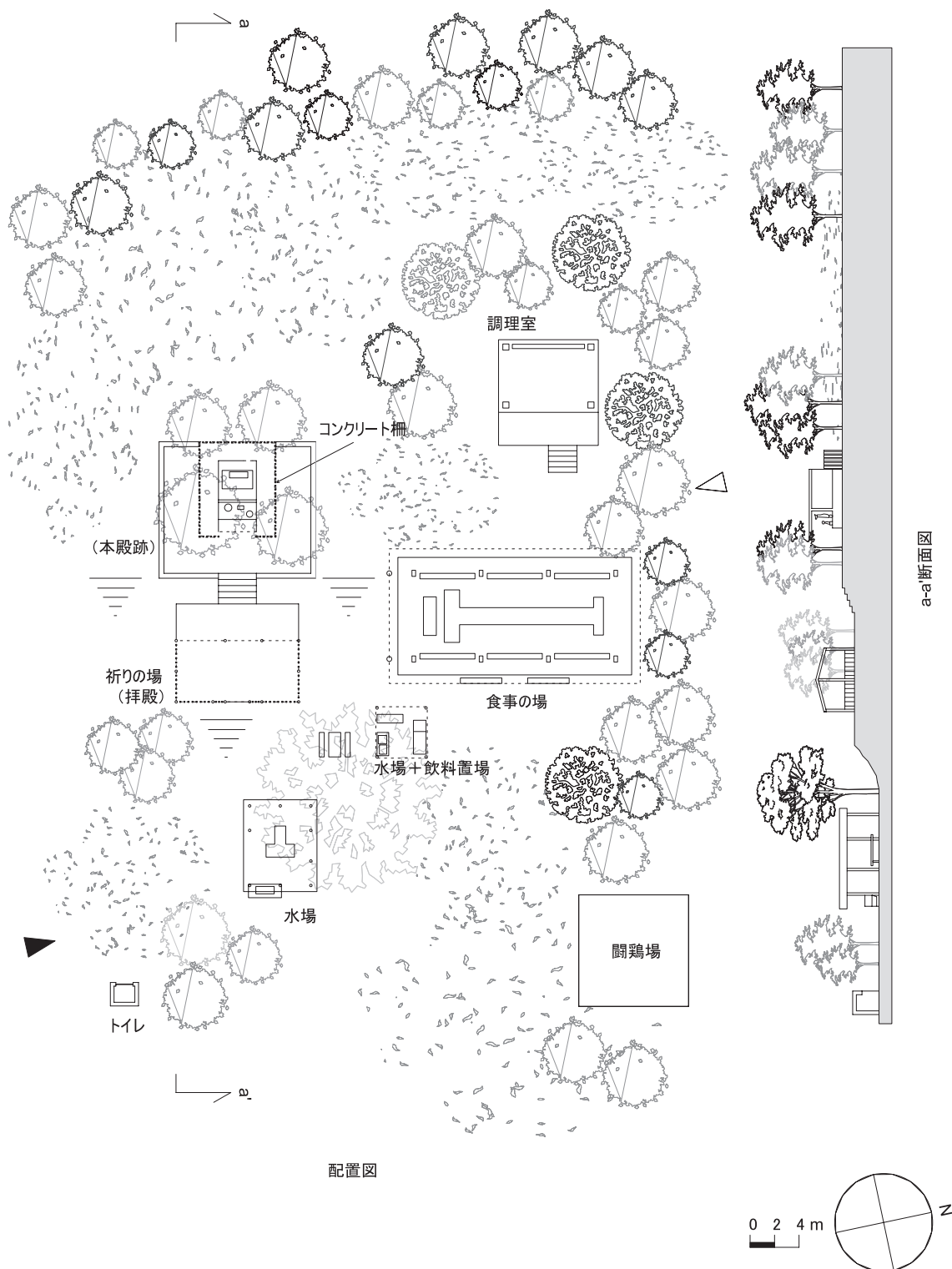


住吉神社



海外神社調査表		No. 南洋—06	
1. 旧名称	和泉神社	a. 現名称	サン・イシドロ
2. 旧所在地	テニアン島マルボ市街	b. 現所在地	テニアン島マルボ市街
3. 創立年沿革	昭和 14 年 7 月 5 日 無格社	c. 戦後の沿革	
祭神	天照大神, 豊受神, 大国主命, 貴船神		
氏子数	1,952 人		
氏子区域	マルボ市街並びに第二農場		
4. 建築内容	流れ造	d. 旧建築	無
本殿		(状況・種類)	有
付属舎		新築	
鳥居, 塔		(用途, 階層, 構造)	
境内地	3,325 坪		本殿基壇, 玉垣 食事空間 (今年鉄骨に建替え), 闘鶏場, 水場, 調理場等あり
5. ヒアリング	<p>聖イシドロはスペインの農業守護聖人。毎年 5 月末にサン・イシドロ祭が行われ、マルボ地区やサン・ジョセからも含めチャモロ、フィリピン人、中国人数百人が集まる。闘鶏では多い人で 500～1,000 \$ 賭ける。</p> <p>祭りは朝から始まり午前中は料理準備、夕方、祈りの後食事、商売をしている街の人間が寄付をする。</p> <p>このサン・イシドロ祭とサン・ホセ祭がテニアンの教会の二大祭。祭りにはサン・ジョセの教会から神父が来る。</p> <p>5 月 5 日のサン・ホセ (街の中心) 祭が最大でグアム、サイパンからも人が集まる。</p>		
6. 所見	<p>本殿基壇をブロックで取り囲み、その上にキリスト教の祭壇を設けている。屋根は切り妻がかかっていたが、現在台風で被害を受け飛んでしまった状態。周辺には新しく祈りの場、食事の場、水場、調理場、トイレが設けられた。</p> <p>電灯もついている。村の人々は祭りの時数百人が集まる。周囲に人家が数件。牧場の牛の声も聞こえる。</p>		
7. 資料内容			
	・写真		
	・絵はがき		
	・図面		
	・地図 南洋群島 (今泉) p. 589 図 3 テニアン島		
	・その他 (本) 戦前の海外神社一覧 (佐藤論文) p. 211		
調査年月	2004 年 8 月 10 日		
	調査者氏名 中島三千男, 富井正憲, 大坪潤子, Simon John, 萩島武司		

和泉神社



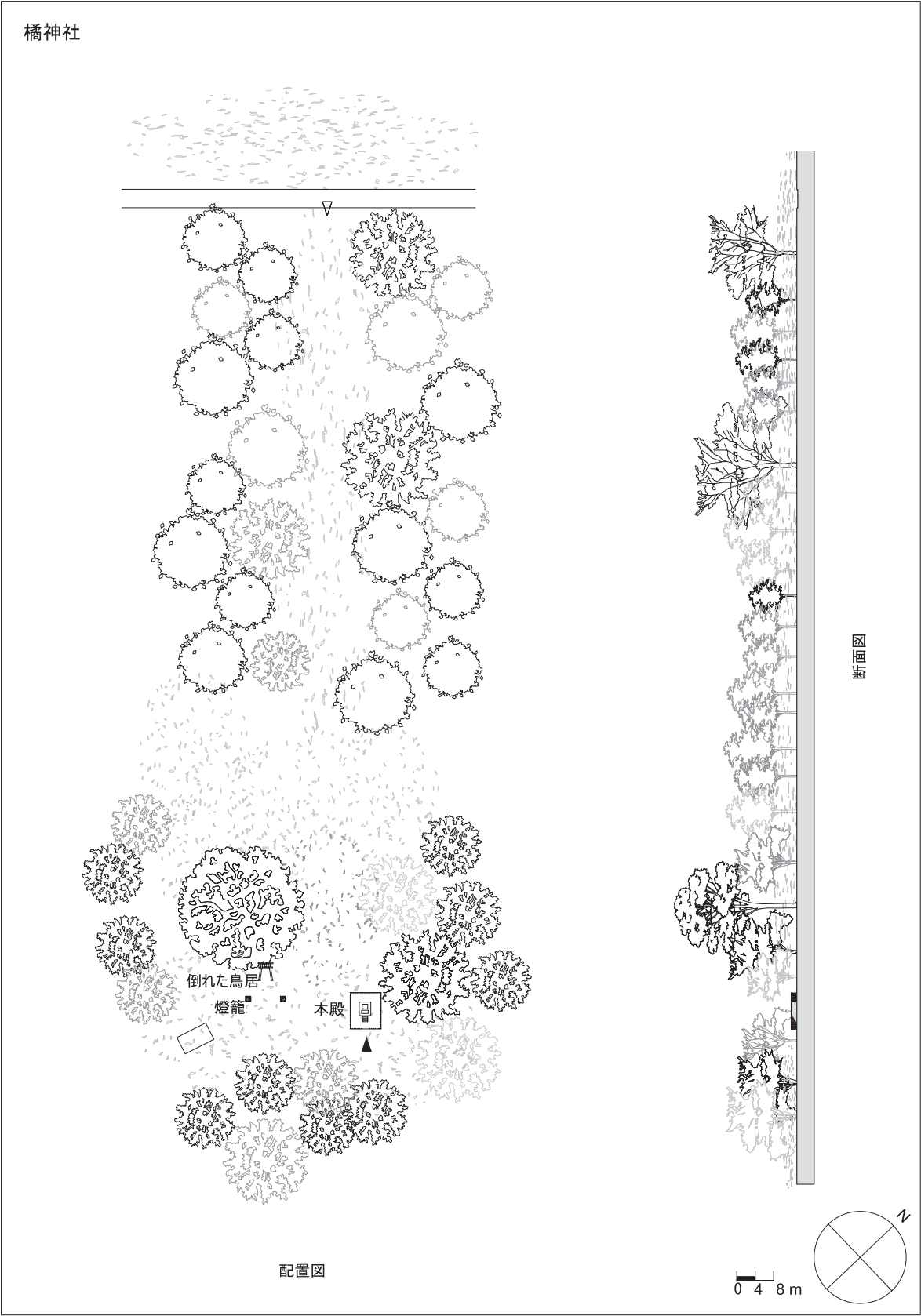
No.南洋-06写真1



和泉神社

海外神社調査表		No. 南洋―07	
1. 旧名称	橋神社	a. 現名称	
2. 旧所在地	テニアン島カーヒー	b. 現所在地	
3. 創立年沿革	1939（昭和 14 年）8 月 3 日 無格社	c. 戦後の沿革	
祭神	天照大神，豊受神，大国主命		
氏子区域	カーヒー並びに第三農場		
4. 建築内容	流れ造	d. 旧建築	無
本殿		（状況・種類）	有
付属舎			
鳥居，塔		新築	
境内地	1,818 坪	（用途，階層，構造）	
5. ヒアリング 周りに密生する植物の中に唐辛子（テニアン・ペッパー）あり。長さ1cm に満たないほどの小さな実だが非常に辛く，毎年ペッパー摘みをして調味料に使っているという。			
6. 所見 ジャングル内。周辺に人家なし。廃墟と化している。旧農場の一部分に森が残り，その中に本殿基壇が残る。 広い平地の中，この場所のみに大きな火炎樹や南洋松が繁っている。他に竹も見える。アプローチは北側より行い，南に回って正面に向かう。南からの直接アプローチも考えられるが，鳥居等は西側のみしか発見できなかった。 鳥居は倒れた状態。地面に着いた面に何か彫られているかもしれないが確かめることは不可能。			
7. 資料内容			
・写真			
・絵はがき			
・図面			
・地図 南洋群島（今泉）p. 589 図 3・テニアン島			
・その他（本） 戦前の海外神社一覧（佐藤論文）p. 211			
調査年月 2004 年 8 月 10 日		調査者氏名 中島三千男，富井正憲，大坪潤子，Simon John， 萩島武司	

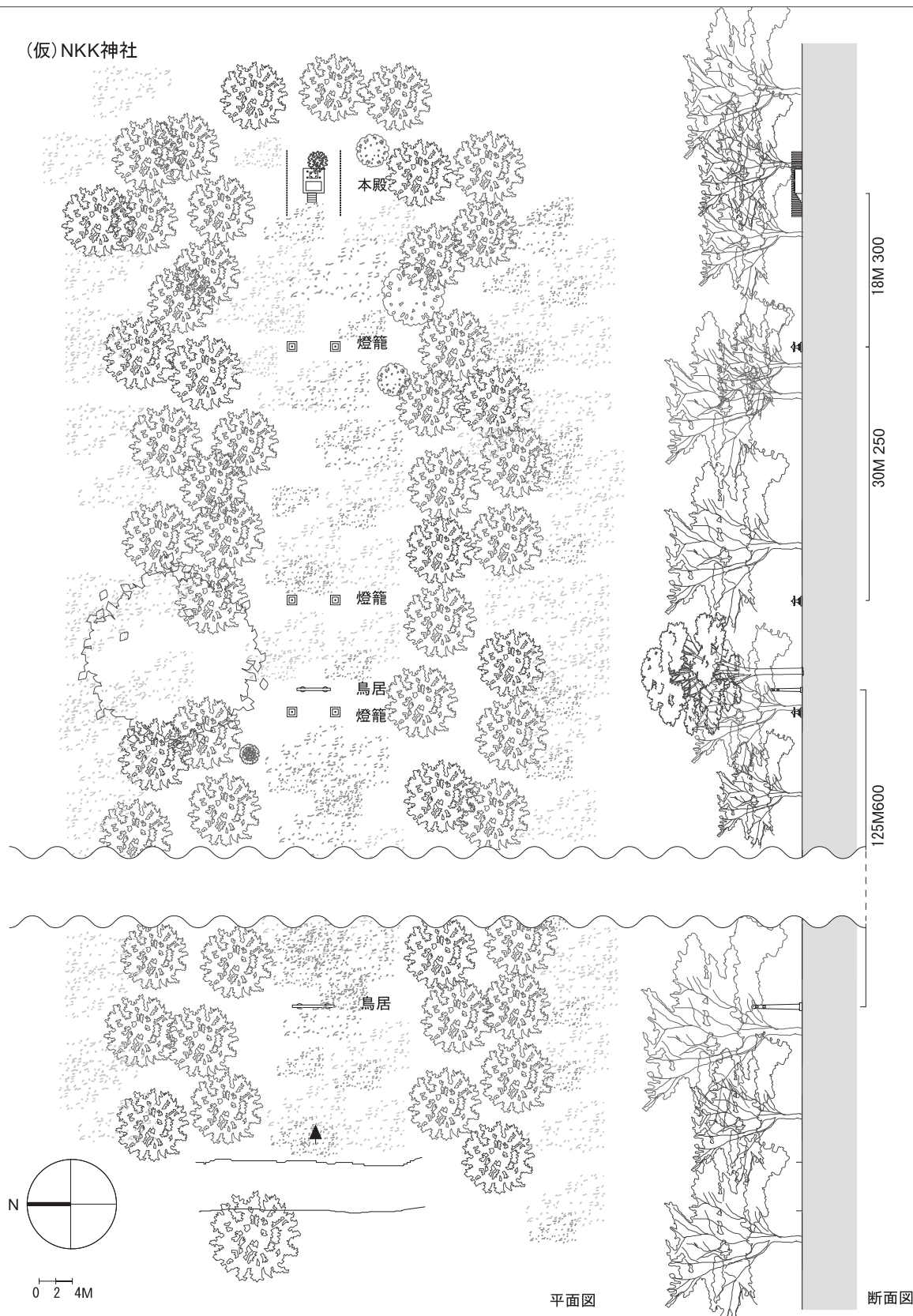
橘神社



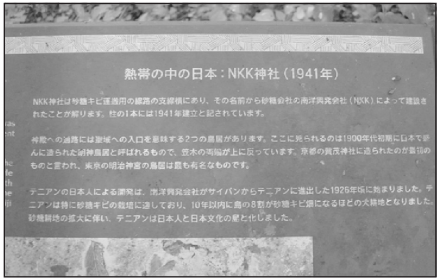


海外神社調査表		No. 南洋―08-1	
1. 旧名称	(仮) NKK 神社	a. 現名称	
2. 旧所在地	テニアン島アンガー	b. 現所在地	テニアン島アシガー
3. 創立年沿革	不明（但し、一の鳥居の柱には、「昭和一六年…」の文字が刻まれている）	c. 戦後の沿革	
4. 建築内容 本殿 付属舎 鳥居、塔		d. 旧建築 無 (状況・種類) 有 新築 (用途、階層、構造)	本殿基壇（少し破損）、玉垣（両サイドのみ）、鳥居（2、完形）、燈籠（3 対=6 基、ほぼ完形）
5. ヒアリング			
<p>6. 所見</p> <p>東向きの配置、完形の鳥居が 2 つと、3 対の燈籠が残っている。広い道から大きな鳥居が見え、奥に入っていくと一回り小さい鳥居が中間に位置し、更に奥に本殿跡があるが 4 分の 1 ほど壊れている。周囲の見通しはよくない。大きな火災樹に数本の南洋松が、境内の雰囲気を残している。現在は何にも使われていない。周囲に人家なくジャングル化。</p> <p>英語／日本語併記の説明版あり。「NKK 神社は砂糖キビ運搬用の線路の支線横にあり、その名前から砂糖会社の南洋興発会社（NKK）によって建設されたことが判ります。柱の 1 本には 1941 年建立と記されています。</p> <p>神殿への通路には聖域への入口を意味する 2 つの鳥居があります。ここに見られるのは 1900 年代に日本で盛んに造られた明神鳥居と呼ばれるもので、笠木の両端が上に反っています。京都の賀茂神社に造られたのが最初のもと言われ、東京の明治神宮の鳥居は最も有名なものです。</p> <p>テニアンの日本人による開発は、南洋興発会社がサイパンからテニアンに進出した 1926 年頃に始まりました。テニアンは特に砂糖キビの栽培に適しており、10 年以内に島の 8 割が砂糖キビ畑になるほどの大耕地となりました。</p> <p>砂糖耕地の拡大に伴い、テニアンは日本人と日本文化の島と化しました。」</p>			
7. 資料内容			
・写真 内海孝氏撮影分			
・絵はがき			
・図面			
・地図 南洋群島（今泉）p. 589 図 3 テニアン島			
・その他（本）戦前の海外神社一覧（佐藤論文）p. 211			
調査年月 2004 年 8 月 10 日		調査者氏名 中島三千男、富井正憲、大坪潤子、Simon John、萩島武司	

(仮) NKK神社



No.南洋-08-1写真1



(仮)NKK神社